

サキヤ派中観思想史研究序説

一師資相承の系譜の分析を中心として一

西 沢 史 仁

序

チベットでは、後代ゲルク派とサキヤ派の間で中観の見解を巡って激しい論争が繰り返されたことは夙に知られた事実である。その論争は、ゲルク派の創始者ツォンカパ・ロブサンタクパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419) の中観思想に対するロントウン・シャーキャゲルツェン (Rong ston Shākya rgyal mtshan, 1367-1449) やタクツァン¹翻訳師シェーラプリンチェン (sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen, 1405-1477) 等のサキヤ派の諸論師の批判を端緒として、特に、十五世紀においてサキヤ派の顕教教学を大成したコラムパ・ソナムセンゲ (Go rams pa bSod nams seng ge, 1429-1489) やパンチェン・シャーキャチョクデン (Paṇ chen Shākya mchog ldan, 1428-1507) 等によるツォンカパの中観思想批判に対して、ゲルク派の僧院教科書 (yig cha) 作成者の一人として知られているセラジェツウン・チュウキギェルツェン (Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544, 以下、セラジェツウンパ) 等が再批判を行なったことで具体化した。セラジェツウンパの批判は、『深甚なる空性に対する誤った分別を否定する論書：悪見の闇を払拭するもの』(Zab mo stong pa nyid kyi lta ba la log rtog 'gog par byed pa'i bstan bcos lTa ba ngan pa'i mun sel)² という著作に纏められているが、その前半部分は、シャーキャチョクデンの批判を反駁した『シャーキャチョクデンに対する答論』(Shak lan)³、後半部分は、コラムパの批判を反駁した『コラムパに対する答論』(Go lan)⁴ と称されている。サキヤ派のツォンカパ批

1 タクツァン翻訳師の没年については、西沢 2018a, p. 51, n. 12参照。

2 『反駁書集成』 pp. 176-518に収録されている。

3 『反駁書集成』 pp. 178-385参照。

4 『反駁書集成』 pp. 385-514参照。

判に対するゲルク派の一連の応論⁵は、一般に『反駁書』(dgag lan)⁶と称される文献群に纏められており、サキヤ派とゲルク派の間には中観の見解を巡って根本的な解釈の相異があったことを如実に示している。その論争の主要な主題は、同書の書名に明記されている通り、空性⁷の見解に関するものであった。

このように、サキヤ派とゲルク派は、共に中観帰謬派説に立脚しつつも、特にその空性に関する解釈を巡っては根本的に異なる立場を取っていたことが両学派の論争史から浮き彫りにされてくるが、両派の空性理解の相異は、コラムバの『見解弁別』(*lTa ba'i zhan 'byed*)等によれば、端的には、サキヤ派では、一般に空性は知や言葉によって捉えられず、存在するとも存在しないとも表現されないものと解釈されたのに対して、ツォンカパを始めとするゲルク派では、空性は知によって理解され、知の対象として存在すると明確に説かれた点にある⁷。

しかるに、既に拙稿(西沢 2018ab, 2019)において明らかにした通り、空性を知の対象として存在すると見なす見解は、決してツォンカパ独自の解釈ではなく、初期サンプ系の学者であるギャマルワ・チャンチュプタク(rGya dmar ba Byang chub grags, ca. 1080-1150)とチャパ・チューキセンゲ(Phya/Phywa/Cha pa Chos kyi seng ge, 1109-1169)の両師弟の著作に既に見出されることが彼らの原典資料に基づき確認された。彼らの空性に関する見解は、空性を知の対象を超えたものと見なすゴク翻訳師ロデンシェーラプ(rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059-1109)やトルンパ・ロトゥジュンネー(Gro lung pa Blo gros 'byung gnas, ca. 1070-1150)の見解を批判的に検討することを通じて打ち立てられたものであった。それ故、空性は知の対象として存在するか否かを巡る論争は、決してゲルク派とサキヤ派の論争が最初であるわけではなく、トルンパ師弟とギャマルワ

5 批判の対象は主にサキヤ派であるが、他にも、セラジェツウンパには、カルマ・カギユ派の論師カルマ・ミキユドルジェ(Karma Mi bskyod rdo rje, 1507-1554)に対する反駁書、『[カルマパの]教説に対する答論：龍樹の密意莊嚴』(gSung lan Klu sgrub dgongs rgyan)、通称、『カルマパに対する答論』(Kar lan) [『反駁書集成』pp. 70-173に収録]が残されている。

6 『反駁書』(dgag lan)と称される文献群は、近年『反駁書集成』(*dGag lan phyogs bsgrigs*)という選集に纏めて出版された。これについては、小林 1999参照。

7 コラムバが提示した三つの中観の学統については、松本 1982に紹介されている。

師弟の論争に端緒を発するものと捉える必要がある。

ところで先に言及したサキヤ派の空性理解は、主にサキヤ派顕教教学の確立者であるコラムパ等の後代の学者の見解を念頭に置いたものであった。しかるに、サキヤ派の学統において、サキヤ五祖 (Sa skya gong ma rnam lnga) のようなサキヤ派教学を創立した初期サキヤ派の学者を始めとする歴代のサキヤ派の諸学者により空性が如何に理解され後代に伝承されていったのかということはこれまで殆ど研究がなく、依然として未知の状態に留まっている。サキヤ派中観思想史の概要は未だ得られていないのである。本稿はそのような状態に鑑み、サキヤ派における中観思想の学統を抽出・整理し、その全体像を俯瞰することを通じて、サキヤ派中観思想史研究の見取り図を作成することを目的とする。この作業により、研究対象として取り上げるべき学者や著作について目処を立て、研究の大凡の枠組みを措定することが可能となるのであり、その次の段階において、具体的なテキスト研究に進むことを予定している。その意味で、本稿は来るべきサキヤ派中観思想研究史のための序説、ないし、その予備的研究と位置付けられる。

さらに、サキヤ派の中観思想を前提としつつ、それを批判的に検討することを通じて確立されたゲルク派の中観思想の研究も将来の重要な研究課題として視野に入れている。ゲルク派の中観思想とその独自性を理解する為には、事前にその文献的・思想的背景を明らかにしておくことが必須であるからである。

研究の手順としては、まず第一に、サキヤ派の聴聞録を資料として取り上げ、サキヤ派に伝承された中観典籍の師資相承の系譜（以下、相承系譜と略称）を概観する。《聴聞録 (gsan yig)》とは、《受法録 (thob yig)》とも称するが、自分が聴聞した各仏典の相承系譜を記録した文書である。⁸ 本稿で依用するのは十八世

8 比較的初期の聴聞録であるプトウン・リンチェンドゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) の聴聞録では、プトウンが師事した各々の上師の名前を明記した上で聴聞したテキストを列挙し、併せて各テキスト毎に師資相承の系譜を付しているが、後代では聴聞した上師の名前が省略されて、聴聞したテキストと師資相承の系譜のみを記すようになった。恐らく、(1) 最初期の聴聞録では、自分が師事した上師と聴聞したテキストのみの記録であり、(2) 後にそれに対して師資相承の系譜を付すようになり (例：『プトウン聴聞録』)、(3) 最終的に、師事した上師の名前が省略されてテキストと師資相承の系譜のみを記すようになった (例：『シュチェン聴聞録』) と推察される。

紀に作成された『シュチェン聴聞録』であり、同書に記載されているサキヤ派における中観典籍の相承系譜を確認することで、サキヤ派の中観の学統に関する大凡の見取り図を得ることが出来る。

次に、12-13世紀に初期サキヤ派教学の形成に直接的に寄与したソナムツェモ (bSod nams rtse mo, 1142-1182) とサパン (Sa paṇ, i.e., Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251)、十四世紀におけるサキヤ派教学中興の祖ラマタムパ・ソナムギェルツェン (Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan, 1312-1375)、十四世紀において特に中観の学統の復興に対して多大な貢献を果たしたレンダワ・シヨヌロトウ (Red mda' ba gZhon nu blo gros, 1349-1412) らの伝記及び関連文献を資料として、サキヤ派の中観の学統を検討する。彼らの伝記資料は聴聞録には現れない情報を提供しており、サキヤ派の中観の学統を考える上で無視できない情報源となっているからである。併せて伝記資料やその他の関連資料から得られた情報に基づき聴聞録に見出される相承系譜の妥当性を検証することも研究の視野に入れている。聴聞録の資料としての信憑性は決して自明ではなく、それ自体批判的な検討対象であるからである。

1. 聴聞録に見出されるサキヤ派の中観説の学統⁹

シュチェン・ツルティムリンチェン (Zhu chen Tshul khirms rin chen, 1697-1774) は十八世紀に活躍したサキヤ派の学匠であり、久しくデルゲ印刷所 (sDe dge dpar khang) のテキスト校訂主任 (zhu dag mkhan po) を務め、デルゲ版のサパン全集やテンギユルの校訂作業を指導した人物として知られている¹⁰。梵蔵の多くの仏典に通達した大学者として、彼の聴聞録はサキヤ派の伝統において権威あるものとされるので、本稿では同書を主資料として採用した。

『シュチェン聴聞録』には、中観論書として、(1) ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 以下、龍樹) の『根本中論』 (*Mūlamadhyamakakārikā*, Tib. *dBu ma rtsa ba shes rab*)、(2) チャンドラキールティ (Candrakīrti) の『入中論』 (*Madhyamakāvatāra*, Tib. *dBu ma la 'jug pa*)、(3) アーリヤ・デーヴァ (Āryadeva) の『四百論』 (*Catuḥśataka*,

9 以下の内容は、西沢 2011、p. 226f. の内容に加筆修正を加えたものである。

10 Jackson 1987、p. 76 参照。彼の略伝は、『雪域人名辞典』 p. 1480f.; 『トゥンカル大辞典』 p. 1774f. を参照。

Tib. *bZhi rgya pa*) の三つが取り上げられているが、この三論書は、チベットでは *rTsa 'Jug bZhi gsum* と総称され、十四世紀に中観の学統を復興したレンダワがこの三論書に対して註釈を著したことを契機として、以後、サキャ派の学統において諸々の中観論書の中でも特に重要視されるようになった。本稿ではその重要性を鑑み、これを《中観三論書》と総称して、その相承系譜を主要な検討対象とする。

本稿ではさらにそれに加えて、『入菩薩行論』(*Bodhisattvacaryāvatāra*, BCA) の相承系譜も検討対象とすることにした。『入菩薩行論』は題目に明記されている通り《菩薩行》を主要主題とするものであり、純粹な意味で中観論書とは云えないものであるが、但し、その第九章冒頭部において中観派の二諦説が論じられており、そこに示された「勝義は知の対象ではない」(BCA IX. 2c)¹¹ というシャーンティデーヴァ (Śāntideva) の見解は、ゴク翻訳師師弟やチャバ師弟等の初期チベット人学者達の二諦説に大きな影響を与えたことが知られている¹²。実際、チベット仏教教学史の初期の段階では、一連の中観論書よりも、『入菩薩行論』の研究の方がより盛んであり、同書に対する膨大な量の註釈書が作成された。それらは彼らの中観思想を研究する上でも重要な資料となっている。

研究の手順としては、最初に上記四論書の相承系譜を各々転写してから、次にその学統を分析することにする。分析に際しては、可能な限り系譜に登場する人物達の身元とその学的背景を明らかにすることに務めた。それを通じて各相承の系統をより具体的に把握することが出来るからである。転写する部分は、原則的にチベット人学者の系譜のみに限定し、シャーキャチョクデンやコラムバの前後廻りまでを採録しておく。

(1) 『根本中論』の相承系譜 [= パツァプ翻訳師に由来するサンブ系の学統]

『シュチェン聴聞録』には、『根本中論』の相承系譜として、三つを挙げているが、そのうち、第二のものはシャーキャチョクデンの二代後のクンガトルチョク (Kun dga' grol mchog, 1507-1566/7) から派生した後代の系譜であるので、本稿ではそれには言及せず、残りの二つの系譜を採録しておく。

11 Tib. don dam blo yi spyod yul min; Skt. buddher agoracas tattvam.

12 西沢 2019, pp.57, 61, 73, 125, 131f. 参照。

系譜① [=パツァブ翻訳師に由来するサンブ系の学統]

... Pa tshab lo tsā ba Nyi ma grags¹³ (1055-1140-?) → rMa bya Byang chub ye shes → [サンブ寺へ] rMa bya Byang chub brtson 'grus (?-1185) → mTshur ston gZhon nu seng ge (ca. 1150-1210)¹⁴ → rMa bya Shākya seng ge¹⁵ → [ナルタン寺へ] Zhang Chos kyi bla ma (1172?-1241, N5) → Sangs rgyas sgom pa Seng ge skyabs (1179-1250, N6) → mChims Nam mkha' grags (1210-1285, N7) → bCom ldan ral gri (1227-1305) → Lo tsā ba mChog ldan → Bla ma dPal ldan seng ge¹⁶ → [シャル寺へ] Bu ston Rin chen grub (1290-1364) → sGra tshad pa Rin chen rnam rgyal → [サキヤ派へ] g-Yag Sangs rgyas dpal¹⁷ (1350-1414)

13 パツァブ翻訳師の略伝や著作等については、西沢 2011、pp.222-224を参照。

14 この人物とその年代については、Hugon 2004, p. viii を参照。

15 この人物は、『カダム明灯史』によれば、ナルタン寺第四代座主ベルデン・トモチェワ (dPal ldan Gro mo che ba, alias, Gro ston bDud rtsi grags, 1153-1232) の師の一人である (同 p. 495.10f.)。それ故、上記系譜には見出されないが、このベルデン・トモチェワがマチャ・シャーキャセンゲとナルタン寺第五代座主シャン・チューキラマの間に介在していると見なすべきかと思われる。

16 この Lo tsā ba mChog ldan → Bla ma dPal ldan seng ge → Bu ston Rin chen grub の相承は、『根本中論』のみならず、一連の密教の師資相承の系譜にも確認される。例えば、『青冊』では、秘密集会 (Guhyasamāja) のジュニャーナパーダ (Jñānapāda) 流の一相承の系譜や (同 p. 453.1f., 16)、勝楽 (Saṃvara) の一相承の系譜にも見出される (同 p. 466.18f.)。他には、時輪 (Kālacakra) の一相承の系譜にも、前二者の名前が確認される (同 p. 919f.)。そこでは、Bla ma dPal ldan seng ge は、「論理学七部論書に通達した者として知られている (Tshad ma sde bdun la mkhas par grags pa)」と記されている。Lo tsā ba mChog ldan と Bla ma dPal ldan seng ge の両者の名は、『カダム明灯史』所収のナルタン寺統史には見出されず、ナルタン寺所属であるか否かは不明である。なお、dPal ldan seng ge は1331年のラマタムバの具足戒の授戒の際に軌範師 (slob dpon, ācārya) を務めた人物である。『ラマタムバ伝』p. 390.5参照。さらに、『プトウン伝』では、「偉大なる持金剛と不二である者 (rDo rje 'chang chen po dang gnyis su ma mchis pa)」と称され、プトウンに時輪等を教授した人物として見出される。『プトウン伝』12a7-b2 (Ruegg 1966, p. 86) 参照。

17 ヤクトウク・サンギェベルの略伝と著作・学統等については、西沢 2011、pp. 399-404を参照。なお、ヤクトウク以下、シャーキャチョクデンに至る相承は、『集量論』や『量評釈』などの師資相承の系譜にも同様に見出され、サキヤ派における主学統の

→ Rong ston Shes bya kun rig¹⁸ (1367-1449) → mKhas pa Don yod dpal
 → Paṇ chen Shāk mchog (1428-1507) → ... (『シュチェン聴聞録』
 pp. 135.1-136.4)

[注。上記系譜中に挿入された寺院名は大凡の目安として付記したものである。¹⁹
 太字は強調部分。N はナルタン寺座主の座主代を示す。例えば、N1は初代ナルタ
 ン寺座主。ナルタン寺の座主代は、後出のナルタン寺座主の系譜に基づく。]

『根本中論』の学統は、チベットにおいてはパツァブ翻訳師に由来し、「パツ
 アブの四子 (Pa tshab kyi bu bzhi)²⁰」と称される彼の四大弟子の一人であるマ
 チャ・チャンチュブイエシエを介して、チャパの「八大獅子 (seng chen brgyad)²¹」
 と称される八人の高弟の一人であるマチャ・チャンチュブツウンドウに伝受さ
 れた。恐らくはこの段階においてサンプ寺に入り、さらに、ツァンナクパ
 (gTsang nag pa brTson 'grus seng ge, 12c.)²²の直弟子の一人にして、サパンの師
 の一人としても知られているツルトウン・シヨンヌセンゲ (mTshur ston gZhon
 nu seng ge, ca. 1150-1210) に受け継がれた。この人物はキャンドウル寺の出身者
 (sKyang/rKyang dur/dur ba) として知られているが、サンプ系の学者である。

一支を形成している。サキャ派における論理学の学統については、西沢 2013、
 pp. 97-100、104f. 参照。

18 ロントウン・シャーキャクンリク (alias, Rong ston Shākya rgyal mtshan) の略伝
 と著作・学統等については、Jackson 1988; 西沢 2011、pp. 405-415を参照。

19 例えば、上記系譜では rMa bya Byang chub ye shes はパツァブ翻訳師の四大弟子
 の一人であるのに対して、rMa bya Byang chub brtson 'grus はサンプ寺のチャパの
 直弟子の一人であるので、後者の段階でサンプ寺へ伝承されたと判断したが、前者が
 サンプ系学者でない明確な根拠があるわけではない。その伝記資料が得られないので、
 委細不明の状態である。また後者の直後の mTshur ston gZhon nu seng ge はキャン
 ドウル寺の僧侶であるが、サンプ系学者であるので、煩雑さを避ける為に、敢えてキ
 ヤンドウル寺の名前は挿入しなかった。その意味で上記系譜に記された寺院名はあく
 までその学統を明らかにするための示徴として便宜的に付されたものであることに留
 意されたい。特に教法後伝期初頭ではまだ後期のように宗派の区別が明確でないで、
 所属宗派不明ないし特定の宗派に属していない者が多数見られることを付言しておく。

20 パツァブの四子については、西沢 2011、p. 224f. を参照。

21 チャパの八大獅子等の一連の弟子達については、西沢 2011、p. 213f. を参照。

22 ツァンナクパの略伝と著作等については、羽田野 1968 pp. 139-145; Kuijp 1989; 西
 沢 2011、pp. 214-216を参照。

その直後のマチャ・シャーキャセンゲについては委細不明であるが、ツルトゥンの弟子筋に当たる人物であるので、同じくサンプ系学者であると推定される。

その後、ナルタン寺に入り、第五代ナルタン寺座主²³シャン・チューキラマ、第六代座主サンギェゴンパ、第七代座主チム・ナムカタク等歴代ナルタン寺座主に伝承された。チョムデン・リクペーレルティ (bCom ldan Rigs pa'i ral gri, 1227-1305, 以下、リクレル) は座主こそ務めなかったが、ナルタン寺の大学匠として著名な人物であり、ナルタン写本大蔵經の編纂を指揮したことで知られている。²⁴それからシャル寺に入り、プトゥンとダツェーパ師弟を介して、サキヤ派のヤクトク・サンギェペル (g-Yag phrug Sangs rgyal dpal, 1350-1414) に伝承された。以下、ロントゥンを始めとするサキヤ派の一連の学僧に伝承されることになる。

端的には、この系統はパツァブ翻訳師に由来するが、主にサンプ寺を初めナルタン寺やシャル寺という一連のサンプ系僧院²⁵を経由して、最終的にサキヤ派に入ったものである。その意味で《サンプ系》と称することが出来る。但し、マチャやツルトゥン等のサンプ系学者を介しているとは言え、マチャやツルトゥンの師であるツァンナクパはパツァブ翻訳師に随順してチャンドラキールティ²⁶の帰謬派の学統を保持する者と伝えられるので、この系統の内実は帰謬派説

23 チム・ナムカタクの略伝と学統、著作等については、伏見 2010；西沢 2011、pp. 256-258を参照。

24 リクレルの略伝と著作、事績等については、西沢 2011、pp. 258-281を参照。

25 十三世紀頃に所謂〈ニエルシクの九子〉と称せられる一連のサンプ寺の学僧達によりウーツァンの各地の僧院に宗派の別を問わずにサンプ系の顕教教学を修学するための講説院 (bshad grwa) が創設されたが、そのような講説院を具備した一連の僧院を「サンプ系僧院」と総称する。西沢 2012、p. 5f 参照。

26 例えば、『青冊』p. 406.11-16：「尊師チャパは尊師チャンドラキールティに対して否定を多数なさったが、それに対して、ツァンナクパは、

「吉祥なるチャンドラキールティの学説に習熟した力により、[その] テキストの意味を確定するに至った私の如き者は、今後現れることがないであろう」

とお説きになり、中観の要綱 (dBu ma'i bsdus pa) もまた大小多数著したが、それらはチャンドラキールティの説である。」

マチャもまた帰謬派説に随順することについては、『青冊』pp. 406.16-407.2：「マチャ・チャンチュブツウンドゥは、聖言と論理学 (lung dang tshad ma) にも非常に通達しているが、中観に依拠して他者を資益することを多数なさり、『根本中論』と『明

に基づくパツァプ系の学統と評してよい。ゴク翻訳師に起源するサンプ系の学統からは区別され、パツァプ翻訳師に起源するサンプ系の学統とでも称せられるべきものである。

系譜② [=パツァプ翻訳師に由来するタンサク系の学統]

... Pa tshab lo tsā ba → [タンサク寺へ] ²⁷Thang sag pa Ye shes 'byung gnas → 'Brom dBang phyug grags → Shes rab rdo rje → sTon tshul pa → bDe ba'i lha → Jo btsun pa → dBu ra ba → Shes rab dpal ²⁸ → Dharmā shes rab → Shes rab rin chen → Puṇya singha → Bag ston bSam bzang → Bag (sic, dMar) ston gZhon nu rgyal mtshan → [サキヤ派へ] Rong ston ... [以下、同上] (『シュチェン聴聞録』 p. 136.1-4)

この系統もまた、パツァプ翻訳師に由来する学統であるが、パツァプ翻訳師の直後には、マチャ・チャンチュプイエシエの代わりに、パツァプの四子の他の一人であるシャン・タンサクパ・イエシエジュンネー²⁹が入り、その後は、一般に余りに目にしない人物名が列挙され、最終的には、サキヤ派のロントウンに伝承されたものである。この一連の人物達の名前は、『入中論』の相承系譜にも確認されるので、まずはそれを紹介しておこう。

句論提要』の註釈 (*Tshig gsal stong thun gyi ti ka*)、中観の要綱 (dBu ma'i bsdus pa)、『タルカの槌』 (*Tarkamudgara*, D 3869) の註釈 (*rTog ge tho ba'i ti ka*) を著作なさったが、[ツァンナクパのみならず] この者 (=マチャ) もまた、尊師チャパの説よりジャヤーナンダ (Jayānanda) 等の説を特に信頼なさっている。」

サンプ系の中観の学統については、西沢 2011, pp. 169-173を参照。所引の文章の英訳は、Roerich 1949, p. 333f.を参照。

27 テキストでは、thangs paと表記されているが、thang sag paの誤記。

28 テキストでは、dBu ra ba Shes rab dpalと一語で記されているが、『青冊』記載のタンサク寺座主の系譜では、Bla ma dBu ra ba/ Slob dpon ston pa Shes rab dpalと区別して表記されているので (『青冊』 p. 418.7)、それに従う。

29 シャン・タンサクパの略伝と著作については、西沢 2011, p. 226に簡単に触れた。彼の『明句論』の註釈が現存しているが、その校訂作業が現在吉水千鶴子その他により進められている (Yoshimizu, et. al., 2013, 2018)。Yoshimizu, et. al., 2013, p. xiiiでは、ca. 1100-1180という年代が提唱されている。

(2) 『入中論』の相承系譜 [=パツァブ翻訳師に由来するタンサク系の学統]

... Pa tshab lo tsā ba Nyi ma grags → [タンサク寺へ] Zhang Thang sag pa Ye shes 'byung gnas → 'Brom dBang phyug grags → Bla ma Shes rab rdo rje → Slob dpon sTon tshul ba → Bla ma bDe ba'i lha → Jo btsun pa → dBu ra ba³⁰ → Shes rab dpal → Dharmā shes rab → Bag ston Shes rab rin chen → rJe bSod nams seng ge → Bag ston bSam gtan bzang po → dMar ston gZhon nu rgyal mtshan → [サキヤ派へ] Rong ston Shes bya kun rig → Don yod dpal pa → Paṇ chen Shākya mchog ldan ... (『シュチェン聴聞録』 pp.136.2-137.2)

この『入中論』の相承系譜は、表記に多少の出入りは見られるが、直前に紹介した『根本中論』の系譜②と完全に一致している。この一連の人物達は、実はシャン・タンサクパにより建立されたタンサク寺の歴代座主に他ならない。³¹

タンサク寺について

タンサク寺 (Thang sag) は、ラサ北方のペンユル ('Phan yul) に位置しており、パツァブ翻訳師がチベットに導入したチャンドラキールティの中観帰謬派説の学統を保持する拠点としてチベット仏教史上大きな役割を果たした学問寺である。タンサク寺の独立した寺統史の現存は確認されていないが、幸いその歴代座主の系譜は『青冊』に採録されている。それは以下の通りである。

図。タンサク寺歴代座主の系譜

[1] Zhang Thang sag pa Ye shes 'byung gnas → [2] 'Brom ston dBang phyug grags pa³² → [3] Slob dpon Shes rab rdo rje → [4] Slob dpon sTon tshul & Grags ldan³³ → [5] Lu dbon Su kha de ba³⁴ → [6] Slob dpon Jo btsun → [7] Bla ma dBu ra ba → [8] Slob dpon sTon pa shes

30 テキストでは、dBur ba と表記されているが、dBu ra ba の誤記。

31 この点は西沢 2011, p. 226f. に指摘し、併せてタンサク寺座主の系譜も提示した。

32 『青冊』のテキストには、'Brom ston の後にシェーが入っているが削除して読む。

33 テキストではこの両者は sku mched gnyis (二兄弟) として併記されているが、Grags ldan の方は所引の『根本中論』や『入中論』の相承系譜には見出されない。

34 sukhadeva は梵語であるが、藏語に直したものが、bde ba'i lha に当たる。

rab dpal → [9] Slob dpon Dar ma shes rab → [10] Bang ston Shes
 rab rin chen → [11] rJe btsun sTon pa bsod nams seng ge → [12]
 Phag (sic, Bag) ston bSam gtan bzang po → [13] Bang ston gZhon
 nu bsam gtan → [14] Slob dpon Thang nag pa → [15] Slob dpon bKra
 shis seng ge → [16] rTa pa gZhon nu bzang po → [17] gSas khang
 ba slob dpon Chos grags → [18] Thang sag pa bSod nams rgyal mtshan
 → [19] rTse ba Kun dga' gzhon nu → [20] Slob dpon Shākya gzhon
 nu → [21] Kun spangs gZhon nu rgyal mtshan → [22] **dMar ston**
gZhon nu rgyal mtshan → [23] Slob dpon Tshul khirms dpal ba →
 [24] Grags pa rgyal mtshan → [25] Slob dpon Rin chen rgya mtsho
 → [26] gDan sa ba Blo gros dpal rin pa [=『青冊』 著作時 (1476-78年)
 の座主] (『青冊』 p. 418.4-17, cf. Roerich 1949, p. 344)

太字で強調した部分は『根本中論』と『入中論』の相承系譜に共通して見出される人物を指す。初代座主シャン・タンサクバから第十二代座主パクトゥン・サムテンサンポまでは一致している。その後、第二十二代座主マルトゥン・シヨンスギェルツェンの間には九人の座主が介在するが、シュチェンの『根本中論』と『入中論』の相承系譜には欠落している。このことは、これらの相承系譜が不完全であり、その情報を鵜呑みにできないことを如実に示唆している。ちなみに、このマルトゥンはロントウンの師の一人であり、ロントゥンにパツァブ系の中観帰謬派説の学統を伝えたことはロントウンの伝記資料からも確認される。³⁵

(3) 『四百論』の相承系譜 [=パツァブ翻訳師に由来するサンブ系の学統]

... Pa tshab Nyi ma grags → Khu mDo sde 'bar → [サンブ寺へ] **rMa**
bya Byang chub brtson 'grus → mTshur gZhon nu seng ge → rMa
 bya Shākya seng ge → [ナルタン寺へ] Zhang Chos kyi bla ma (N5)
 → Sangs rgyas sgom pa Seng ge skyabs (N6) → mChims Nam mkha'

35 『ロントゥン伝』 p. 308.1f. 参照。そこでロントゥンは、タンサク寺において、トゥルク・シヨンスギェルツェン (sPrul sku gZhon nu rgyal mtshan) から、『根本中論』、『四百論』、『入中論』を聴聞したと記されている。

grags (N7) → sKyo sMon lam tshul khirms (1219-1299, N8)³⁶ → dBu
 ma pa Byang chub grub → dBang phyug grags → mKhan [po?] bSod
 nams mtshan can³⁷ → rJe Grags pa rgya mtsho³⁸ → mKhan chen Grub
 pa shes rab (1357-1423, N14)³⁹ → [カルマ・カギュ派へ] Karma dKon
 mchog gzhon nu⁴⁰ → [サキヤ派へ] Rong ston thams cad mkhyen pa →
 Bla ma Don yod dpal → Paṇ chen Shākya mchog ldan ... (『シュチェン聴
 聞録』 pp. 137.2-138.1)

『四百論』の相承系譜は、基本的に、『根本中論』の系譜①と同様に、パツァ

36 キョトウン・モンラムツルティム (sKyo ston sMon lam tshul khirms) のこと。彼の略伝は『カダム明灯史』 p. 504f. に掲載されているほか、『カダム全集第二集目録』 pp. 72-74を参照。『カダム全集』第50巻にはキョトウンの二十四点の作品が収録されている。キョトウンはかのリクレルの師の一人である。『カダム明灯史』 p. 504.21参照。キョトウンとリクレルの関係については、西沢 2011、p. 261f. を参照。

37 この人物の正式な名前は不明であり、『シュチェン聴聞録』の傍註には、「この〔人物の〕御名は〔要〕探索 (di'i mtshan btsal)」と付記されている (同 p. 137.4)。これに関連して興味深いのは、『カダム派史』には、第10代座主に異説があることを紹介しているが (同 p. 43f.)、それは、ナルタン寺座主の系譜を示す *Glegs bam rin po che* という著作に、第9代座主の後に、bSod nams mchog gi mtshan ldan pa (bSod rnam sgron 尊者という御名を有する者) が教法の炎を保守すると記されていることである。ここでは、① Chos rje Grub she ba (i.e., Grub pa shes rab) の甥である bSod nams mchog grub を立てる説と、② sNar thang sPyan snga bSod nams rgyal mtshan を立てる説と、③ sNar thang mkhan po の一人である bSod nams dar という人物を立てる説の三つの異説が紹介されている。もし系譜中の mKhan [po?] bSod nams mtshan can がこれを念頭に置いたものであるならば、この人物はナルタン寺第10代座主に相当する人物であることになる。この点は検討課題である。

38 直後の第十四代座主ドゥッパシェーラプの略伝には、彼が師事した師の一人に、Slob dpon Grags pa rgya mtsho という人物が見出されるが (『カダム明灯史』 p. 507.17)、おそらくはその人物を指す。その場合、ナルタン寺座主でないにせよ、ナルタン寺所属である可能性が高い。

39 略伝は『カダム明灯史』 pp. 507.11-508.8参照。年代もそれに依る。ロントウンの師の一人であり、彼の下で律典やカダムの法を多数聴聞したとされる。『ロントウン伝』 p. 311.1参照。

40 このカルマ [パ]・クンチョクシヨンヌは、ロントウンの師の一人であり、彼の下で弥勒の五法等の多数の法を聴聞したとされる (『ロントウン伝』 p. 310.5)。

ブ翻訳師に由来し、サンプ寺とナルタン寺を経由して、サキヤ派のロントウンに伝承されたものである。その意味でパツァブ翻訳師に由来するサンプ系の学統と評せられる。相異は、『根本中論』の系譜①では、チム・ナムカタクの後には、リクレル以下三名を経由して、シャル寺のプトウン・ダツェーバ師弟に伝えられてから、ロントウンに入ったものであるのに対して、この『四百論』の相承系譜では、ナルタン寺第七代座主チム・ナムカタクまでは同様の系譜であるが、以下、第八代座主キョ[トウン]・モンラムツルティム等の五名を経由して第十四代座主ケンチェン・ドゥッパシェーラブ、カルマ・カギユ派のカルマ・クンチョクシオンヌ、そしてサキヤ派のロントウンに伝承されたものである。第八代座主と第十四代座主の間の四名は、『カダム明灯史』所収のナルタン寺統史にその名前が確認されず、身元不明である。ナルタン寺の一連の座主は、既に見たように、タンサク寺の歴代座主と並び、チベットにおける中観思想の伝承において重要な役割を担ったので、その重要性を鑑みて、ここでナルタン寺歴代座主の系譜を確認しておこう。

ナルタン寺について

ナルタン寺 (sNar thang) は、カダム・シュン派の大学匠シャラワ・ユンテンタク (Sha ra ba Yon tan grags, 1070-1141) の直弟子の一人であるトゥムトウン・ロトウタクパ (gTum ston Blo gros grags pa, 1106-1166) により、1153年にツァン⁴¹地方のナルタンにおいて建立されたカダム派の古刹である。特に、近隣のサキヤ寺やタシルンポ寺等と緊密な関係があり、サキヤ派やゲルク派の教学形成に大きな影響を及ぼしたことで知られている。ナルタン寺では元来カダム教学が修学されてきたが、サンプ寺第三代上院法主ニエルシク・ジャムペルドルジェ (mNyal/gNyal zhig 'Jams dpal rdo rje, ca. 1150-1230) の《九子 (bu dgu)》と称せられる九人の筆頭弟子の一人であるキェルナク・タクパセンゲ (sKyel nag Grags pa seng ge, ca. 1180-1260) が十三世紀中葉にサンプ教学の修学の場として《講説院 (bshad grwa)》と称せられる顕教学校をナルタン寺に創立したことを契機として、以後サンプ系の顕教教学が兼学されるようになった。ナルタン寺の教学

41 ナルタン寺とその教学については、羽田野伯猷の先駆的な研究 (羽田野 1966) があるほか、伏見 2010；西沢 2011、pp. 252-291を参照。

を「サンプ系」と称するのはそれが根拠となっている。ナルタン寺には宗派の別を問わず多くの高名な学者達が来訪して研鑽を積んだことが知られており、かのツォンカパもまたそのうちの一人である。一言で云うならば、サンプ系の顕教教学一般と道次第や修心等のカダム教学を総合的に修学することが出来る大学問寺であった。

ナルタン寺の比較的纏まった寺統史は『カダム明灯史』（1494年造）に収録されているほか、『赤冊』（1346-63年造）、『ヤルルン仏教史』（1376年造）、『青冊』（1476-78年造）、『カダム珍宝史』（1484年造）、『カダム派史』（1484年造）、『新旧カダム史』（1529年造）、『黄瑠璃史』（1698年造）等にもより簡略なものが収録されている⁴²。その中でも特に、第四代タシルンポ寺座主パンチェン・イエシェツェモ（Paṅ chen Ye shes rtse mo, 1433-1513⁴³-?）により1484年に著作された『カダム派史』（*bKa' gdams rin po che'i bstan 'dzin rnams kyi byung khungs*, lit. カダムという宝の教法保持者達の起源）は、より詳細な年代情報を提供してくれるので、それを主資料として、『カダム明灯史』等の他の一連の史料も併せて参照することにした。『カダム明灯史』はより詳細なナルタン寺歴代座主の略伝を含むが、年代情報はやや貧弱なきらいがある。それに対して、『カダム派史』の著者イエシェツェモは、ナルタン寺でも修学経験があり、1462年には当時のナルタン寺第十六代座主ケンチェン・タクパトウンドゥブ（mKhan chen Grags pa don grub）を戒師（mkhan po, upādhyāya）、スーパペルドゥブ（bZod pa dpal grub, 注。後の第十七代座主）を軌範師（slob dpon, ācārya）、シェーラブギャンツォ（Shes rab rgya mtsho, 注。後の第十九代座主）を密師（gsang ston, raho'nuśāsaka）として具足戒を

42 ナルタン寺統史の収録箇所は以下の通り：『カダム明灯史』 pp. 493-513；『赤冊』 p. 62f.；『ヤルルン仏教史』 pp. 101-104；『青冊』 p. 344f.；『カダム珍宝史』 pp. 330-333；『カダム派史』 pp. 41-45；『新旧カダム史』 pp. 24-27；『黄瑠璃史』 p. 259f.

43 直弟子であるダライラマ二世ゲンドウンギャンツォ（rGyal ba dGe 'dun rgya mtsho, 1476-1542）が記した伝記（『イエシェツェモ伝』）によれば、火末年（1487）から水申年（1512）までの26年間タシルンポ寺座主を務めたと明記されている（同 p. 130）。タシルンポ寺座主就任年については、一連の史書に解釈が一致しないが（西沢 2011, p. 692, n. 2894）、同伝の記述により問題は解消された。没年は未詳であるが、同伝にはその死亡が言及されていないので、同伝の著作年である1513年（同 p. 136）にはまだ生存していたことが確認される。

受戒したことが知られている。⁴⁴当時のナルタン寺の情報を直接に得る立場にあったので、イエシェツェモが提示する年代情報はより信頼に値すると考えられるのである。

図. ナルタン寺歴代座主の系譜

- [1] gTum ston Blo gros grags pa (1106-1166) [在 *1153-1166 (⁴⁵14)] →
 [2] rDo ston Shes rab grags pa (1129-1187) [在 *1168-1187 (⁴⁶20)] →
 [3] Zhang btsun rDo rje 'od (1122-1194) [在 *1187-1194 (⁴⁷8)] → [4]
 Gro [ston] bDud rtsi grags/ dPal ldan Gro mo che ba (1153-1232) [在
 *1194-1232 (⁴⁸39)] → [5] Zhang ston Chos kyi bla ma (1172-1241) [在

44 『イエシェツェモ伝』 p. 69参照。

45 『カダム派史』には、氏族 (gdung) 名はトゥム氏 (gTum)、火戌年 (1106) に生誕、48歳の水酉年 (1153) にナルタン寺建立、座主として14年間に在任、61歳の火戌年 (1166) の rGyal zla (鬼宿月、藏暦12月) 8日 (12/8) に逝去とある (同 p. 41)。『カダム明灯史』では、命日は同じ rGyal zla の23日とあり、その点に相異が見られる (同 p. 495f.)。但し、『藏漢大辞典』によれば、rGyal zla には、他に仲冬月 (11/16-12/15) の意味もあり (同 p. 557)、その場合には、rGyal zla の23日は、12/8 となり、一致することになる。両史書に見られる命日の違いは、rGyal zla の捉え方の違いに由来し、実質的には同じ日 (12/8) を指しているのかもしれない。この点は検討課題である。

46 『カダム派史』には、氏族名はド氏 (rDo)、土酉年 (1129) 生誕、20年間に在任、59歳の火未年 (1187) dPyid 'bring (仲春月、藏暦2月) 13日に逝去とする (同 p. 41)。他方、『カダム明灯史』では、火未年 (1127) に生誕、40歳の年 (1166) に座主に就任、59歳 (1185) まで20年間に在任、木巳年 (1185) 年 Khra zla (藏暦2月) 13日に逝去とある (同 p. 494)。ここでは生没年は主資料とした『カダム派史』の年代を採用しておくが、問題は座主在任期間である。『カダム明灯史』によれば、1166-1185年の20年間となるが、『カダム派史』では、没年は、1187年とされるので、逆算するならば、1168-1187年の20年間となる。この場合、初代座主の退任年 (= 没年) である1166年から二年間空位があったか、あるいは、在任期間は20年間ではなく、22年間 (1166-1187) の誤りである等の可能性が考えられるが、20年間座主を務めたことは一連の史書に一致しているので、今は暫定的に、1168-1187年を在任期間として想定しておく。

47 『カダム派史』には、氏族名はシャン氏 (Zhang)、水寅年 (1122) に生誕、8年間に在任、73歳の木寅年 (1194) sNron gyi zla ba (心宿月、藏暦4/16-5/15) 14日 (4/29) に逝去とあり (同 p. 42)。『カダム明灯史』では、寅年に生誕、8年間に在任、寅年に逝去とある (同 p. 494)。在任期間は、1187年から8年なので、1194年までとなる。

*1232-1241 (10)⁴⁹] → [6] [Sangs rgyas] sgom pa Seng ge skyabs
 (1179-1250) [在 *1241-1250 (10)⁵⁰] → [7] mChims Nam mkha' grags
 (1201-1285) [在 *1250-1285 (36)⁵¹] → [8] sKyo ston sMon lam tshul
 khirms (1219-1299) [在 *1285-1299 (15)⁵²] → [9] Chos rje Nyi ma rgyal
 mtshan (1225-1305) [在 *1299-1305 (7)⁵³] → [10] Ze'u Grags pa brtson

48 『カダム派史』には、氏族名はト氏 (Gro)、水酉年 (1153) に生誕、39年間在任、80歳の水辰年 (1232) Sa ga'i mar ngo (氏宿月 (藏暦 4月) の下旬) 9日 (4/24) に逝去とあり (同 p. 42)。『カダム明灯史』にも同様に記されている (同 p. 494f.)。在任期間は、1192-1230年と算定される。

49 『カダム派史』には、氏族はシャン氏 (Zhang)、水辰年 (1172) に生誕、10年間在任、58歳 (70歳の誤り?) の鉄丑年 (1241) Sa ga (氏宿月、藏暦 4月) 21日 (4/21) に逝去とある (同 p. 42)。『カダム明灯史』にも、辰年に生誕、10年間在任して、丑年に逝去とある (同 p. 495f.)。

50 『カダム派史』には、氏族名はキヨ氏 (sKyo)、土亥年 (1179) に生誕、10年間在任、72歳の鉄戌年 (1250) dPyid tha (季春月、藏暦 3月) 5日 (3/5) に逝去とある (同 p. 42)。『カダム明灯史』も同様に記すが、臨終の際の有り様については、*rNam thar mya ngan 'das chung ma* という伝記から長い偈文を引用しており、dPyid zla tha chung (藏暦 3月) 5日の夜半 (nam phyed) 過ぎに逝去したと明記している (同 pp. 496-501)。座主就任年については、『ツェテン仏教史年表』では、前座主シャンの没年である鉄丑年 (1241) を立てており (同 p. 186)、『雪域人名辞典』や『トゥンカル大辞典』でも、63歳の鉄丑年 (1241) としている。その場合、1241-1250年の10年間が在任期間となる。

51 『カダム派史』には、氏族名はチム氏 (mChims)、鉄午年 (1210) に生誕、36年間在任、76歳の木午年 (1294) Sa ga (氏宿月、藏暦 4月) 14日 (4/14) に逝去とあるが (同 p. 43)、76歳没であれば、没年は1285年の木酉年の誤りである。実際、『カダム全集第二集目録』によれば、1210年の鉄午年に生誕、1250-1285年の36年間座主に在任し、1285年の木酉年に逝去したとあるので (同 p. 70f.)、それに従う。『カダム明灯史』には、午年に生誕、36年間在任、子年 (byi ba'i lo, sic) に逝去とあるが (同 p. 503f.)、没年は酉年 (bya'i lo) の誤記であろう。

52 『カダム派史』には、氏族名はキヨ氏 (sKyo)、土卯年 (1219) に生誕、15年間在任、81歳の亥年 (1299、土亥年) dBo zla (翼宿月、1/16-2/15) 14日 (1/29) に逝去とある (同 p. 43)。『カダム明灯史』には、子年 (byi ba lo, sic) に生誕、15年間在任、亥年に逝去とあるが (同 p. 504)、『カダム全集第二集目録』によれば、1219年の土卯年に生誕、1285-1299年の15年間在任し、1299年の土亥年に逝去とあり (同 p. 72f.)、『カダム派史』の記述と一致する。

'grus/ mKhan chen 'Dul ba 'dzin pa (1253-1316) [在 *1305-1316 (12)⁵⁴]
 → [11] Ze'u 'bru Grags pa shes rab (*1259-1337?) [在 *1316-1337?
 (11/12, sic, *22?⁵⁵)] → [12] mChims Blo bzang grags pa (1299-1375)
 [在1337-1375 (39)⁵⁶] → [13] Gro ston Kun dga' rgyal mtshan

53 『カダム派史』には、氏族名はラム氏 (Ram)、木酉年 (1225) に生誕、7 年間在任、81歳の本巳年 (1305) Sa ga (氏宿月) 24日 (4/24) に逝去とある (同 p. 43)。『カダム明灯史』では、酉年に生誕、7 年在任、巳年に逝去 (同 p. 504f.)。

54 『カダム派史』では、Ze'u Grags pa brtson 'grus と表記されるが (同 p. 44.7)、mKhan chen 'Dul ba 'dzin pa 『カダム明灯史』 p. 505.20、『ヤルルン仏教史』 p. 103.10、『カダム珍宝史』 p. 332.4)、'Dul ba 'dzin pa Grags pa brtson 'grus ze'u 『赤冊』 p. 63.15)、Ze'u ba brtson 'grus grags pa 『青冊』 p. 344.16)、'Dul 'dzin Grags pa brtson 'grus 『新旧カダム史』 p. 24.4)、Grags pa brtson 'grus 『黄瑠璃史』 p. 259.18) など種々の表記が見られる。Ze'u は氏族名であり、法名は Grags pa brtson 'grus、'Dul ba 'dzin pa (*Vinayadhara) は敬称である。

『カダム派史』は、この第十代座主が誰かということについてナルタン寺に種々の伝承が見られることを伝えている (同 p. 43f.)。同書では疑問符付きであるが、Ze'u Grags pa brtson 'grus を立てており、他の一連の史書も同様であるが、現行の系譜にはこの箇所に欠落や乱れが存在する可能性は否定できない。『カダム派史』では、ここから各座主の生没年等は全て省略され座主名のための提示となるので、以下は、主に『カダム明灯史』に基づき、年代考証を行なう。『カダム明灯史』には、丑年に生誕、12 年間在任し、辰年に逝去とある (同 p. 505f.)。その場合、在任期間は、1305-1316年となるが、1316年は火辰年であるので、没年に比定される。『雪域人名辞典』には、1253年の水丑年に生誕、1316年の火辰年に逝去。1305年の木巳年から十二年間在任したとある (同 p. 887)。

55 この人物は情報が稀少であり、しかも史書により情報が錯綜している。まず、『カダム明灯史』には、この人物を前座主の弟 (gcung po) として、gcung po Grags pa shes rab と表記、未年に生誕、11年間在任とするが、没年は不言及である (同 p. 506)。他方、『青冊』や『ヤルルン仏教史』では、弟と見做す点では一致するが、12年間在任とし (同 pp. 344.18; 103.15)、『赤冊』では、弟ではなく、弟子 (slob ma) と記し、在任年数は不明記 (同 p. 63.17)。『カダム珍宝史』では、mKhan chen Grags pa shes rab と記し、未年に座主に就任し、11年間在任したとする (同 p. 332.6)。

まず生年については、弟であれば、1259年の土未年、弟子であれば、1271年の鉄未年の可能性が高い。今は暫定的に弟と見なして、1259年を生年に比定しておく。問題は座主在任期間と没年である。前座主の退任年である1316年 (火辰年) が座主就任年と推定されるが、その場合、未年を就任年とする『カダム珍宝史』の記述と一致しな

(*1326?-1401) [在1375-1389 (27, sic, *15?⁵⁷)] → [14] dPang ston Grub
pa shes rab (1357-1423) [在1389-1418 (30)⁵⁸] → [15] Chos rje bSod

い。さらに直後の mChims Blo bzang grags pa は後述するように1337年（火丑年）に座主に就任したことが知られているので、その年がこの Grags pa shes rab の退任年と想定されるが、その就任年は、在任年数を11年間とするならば、1327年、12年間とするならば、1326年となる。その場合、1316-1326/27年の間か、あるいは、1326/27-1337年の間に空白期間が生ずることになり、この点を如何に解釈するべきかが問題となる。

これに対しては、(1) 11年ないし12年の在任年数は22年の誤りであり、当座主の在任期間は1316-1337年とする解釈が一つ考えられる。実際、在任年数には、史書により揺れが見られるので、誤記の可能性は多いにあり得る。他方、仮に11年ないし12年の在任年数が正しいのであれば、上述したように、(2) 10年程の空位期間を想定するか、あるいは、(3) 一代程座主名が欠落している可能性も考えられる。

以上の三つの可能性のうち、情報不足のため何れが妥当であるか決め手に欠けるが、10年間も空位期間があったとは常識的に考え難いので、第一か第三の可能性の何れかということになる。今は、暫定的に、在任年数を22年の誤りと見なして、1316-1337年を在任期間と想定しておくが、その妥当性は今後の検討課題である。

- 56 『カダム明灯史』には、氏族名はチム氏 (mChims)、亥年に生誕、39年間座主を務め、卯年に逝去としか記されていないが (同 p. 506)。『雪域人名辞典』には、土亥年 (1299) に生誕、火丑年 (1337) から39年間座主を務め、火卯年 (1375) に逝去とある (同 p. 598f.)。『青冊』や『ヤルルン仏教史』では40年間在任とあるが (同 p. 344.18; 103.16)、退任年が没年を一年超過することになるので、取らない。『カダム珍宝史』には、39年間在任と明記 (同 p. 332.6)。『赤冊』 (1346-63年造) ではここまで採録。
- 57 『カダム明灯史』には、氏族名はト氏 (Gro)、寅年に生誕、木卯年 (1375) に座主に就任、27年間在任し、鉄巳年 (1401) に逝去とある (同 p. 506f.)。『ヤルルン仏教史』には、より詳しく、水卯年の2月22日に就任と明記されている (同 p. 104.2f.)。『ヤルルン仏教史』 (1376年造) はここまで採録。『青冊』にも、木卯年に座主就任と明記 (同 p. 345.1f.)。生年は、可能性としては、木寅年 (1314) と火寅年 (1326) と土寅年 (1338) の三つが挙げられるが、今は暫定的に火寅年 (1326) を想定しておく。問題は座主退任年である。『カダム明灯史』によれば、1375年から27年間在任したとあるので、退任年は1401年となる。しかるに、次の第14代座主は土巳年 (1389) に座主に就任したことが『カダム明灯史』に明記されているので、これはありえない。27年間という数字は、恐らく没年を退任年と同年と想定した上で算出されただけの数字と思われる。それ故、今は暫定的に1375-1389年の15年間を在任期間と想定しておく。その場合、1389年に退位し元座主 (khri zur) として13年住してから、1401年に逝去ということになる。なおこの人物は、1379年頃にかのツォンカバに中観六理聚の聖言を授けた人

nams mchog grub (1399-1452) [在1418-1433 (16)]⁵⁹ → [16] Chos rje Grags pa don grub/ mKhan chen Grags don pa (1377-1467) [在1438-1467 (30)]⁶⁰ → [17] Chos rje bZod pa dpal grub/ bKa' bcu pa bZod pa ba (1401-1470) [在1468-1470 (3)]⁶¹ → [18] 'Dul 'dzin dPal ldan bzang po (1402-1473) [在1470-1472 (3)]⁶² → [19] mKhan chen 'Jam dbyangs shes rab rgyal mtshan (1421-1486-?) [在1472-1485 (14)]⁶³ → [20] mKhan chen Grags pa shes rab (1424-1494-?) [在1486-1494-?]⁶⁴ ...

物としてツォンカパの伝記資料にも言及されている。石濱/福田 2008、p. 55；西沢 2011、p. 426参照。

- 58 『カダム明灯史』には、氏族名は dBang と記されているが（同 p. 507.12）、『カダム派史』に、dPang ston と記されている通り（同 p. 45.3）、dPang（パン氏）の誤記である。火酉年（1357）に生誕、32歳の土巳年（1389）に座主に就任、30年間在任して、土戌年（1418）に退任、自身の甥の bSod nams mchog grub を座主に任命し、5年間元座主（khri zur）として住してから、67歳の水卯年（1423）に逝去。ツォンカパ（1357-1419）と生年が同年であり、dPal Yid bzang rtse pa chen po (alias, 'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, 1392-1481) の師でもある（『カダム明灯史』 p. 507f.）。
- 59 『カダム明灯史』には、氏族名はシュル氏（Zhur）、土卯年（1399）に生誕、土戌年（1418）から水丑年（1433）の16年間座主を務め、55歳（54歳？）の水申年（1452）に逝去とある（同 p. 508f.）。
- 60 『カダム明灯史』には、氏族名はト氏（Gro）、火巳年（1377）に生誕、62歳の土午年（1438）に座主に就任、30年間在任してから、91歳の火亥年（1467）に逝去とある（同 p. 509）。前座主の退任年が1433年なので、6年間（1433-1438）の空位期間があることになる。『青冊』には、sPyan snga Grags pa ba と表記（同 p. 345.9f.）。
- 61 『カダム明灯史』には、氏族名はト氏（Gro）、鉄巳年（1401）に生誕、68歳の土子年（1468）に座主に就任、3年間在任してから、70歳の鉄寅年（1470）に逝去とある（同 p. 510）。『青冊』には、bKa' bcu pa bZod pa ba と表記（同 p. 345.10）。
- 62 『カダム明灯史』には、水午年（1402）に生誕、69歳の鉄寅年（1470）に座主に就任、3年間在任して、72歳の水巳年（1473）に逝去とある（同 p. 510f.）。
- 63 『カダム明灯史』には、氏族名は、カル氏（dKar）、鉄丑年（1421）に生誕、52歳の[水]辰年（1472）に座主に就任、14年間在任し、その後、元座主（khri zur）として住したとある（同 p. 511f.）。退任年は1485年となるが、没年は明記されていないので不明。『青冊』には著作時現在の座主として記されている（同 p. 345.11）。『青冊』は、1478年に完成されたが、1476年を文中の「現在（da lta）」とするので、1476年までの生存は確認されたことになる『青冊』の著作年を巡る問題については、羽田野 1954、p. 65を参照。『カダム珍宝史』には、52歳の水辰年（1472）に座主に就任、水卯年

[注。最初の (...) は生没年、[在...] は座主在任期間、その中の (...) は在任年数。ナルタン寺の建立年 (1153) を初代座主の就任年と見なして算出した。人名表記は基本的には『カダム派史』に依拠し、『カダム明灯史』等に大きな異読が見られる場合には適宜に併記した。]

『カダム派史』、『カダム珍宝史』、『青冊』では、第十九代座主ジャムヤンシェーラブギェルツェンまで、『カダム明灯史』では、第二十代座主タクパシェーラブまでの系譜が掲載されている。中観三論書の相承系譜にその名が言及されたものは、第五代座主シャントウン・チューキラマから第八代座主キョトウン・モンラムツルティムまでの四名と、飛んで第十四代座主パントウン・ドゥッパシェーラブとで合計五名を数える。

ところで先に指摘したように、『四百論』の相承系譜では、第八代座主キョトウンから、第十四代座主パントウン・ドゥッパシェーラブまでの間に、所属不明の四人の人物が介在していた。そのうち、mKhan [po?] bSod nams mtshan can と rJe Grags pa rgya mtsho の二人はナルタン寺所属の可能性があるが、残りの dBu ma pa Byang chub grub と dBang phyug grags の両名は、ナルタン

(1483) まで12年経ったと記されている (同 p. 333.4f.)。同書は1484年造なので、その前年までの記録である。『カダム派史』は木辰年 (1484) を「現在 (da lta)」としてここまで採録する (同 p. 45)。なお、『カダム派史』は、'Jam dbyangs shes rab rgyal mtshan と表記するが、他の一連の史書では、'Jam dbyangs は脱落して、Shes rab rgyal mtshan とのみ表記されている。

64 『カダム明灯史』には、氏族名はニェン氏 (gNyan)、木辰年 (1424) に生誕、63歳の火午年 (1486) に座主に就任。『カダム明灯史』著作時 (1494年) の座主であるので、退任年と没年は不明記 (同 p. 512f.)。

これ以降の系譜は部分的なものであるが、『黄瑠璃史』から回収できる。即ち、『黄瑠璃史』では、第19代座主 Shes rab rgyal mtshan まで記載されており、その後には、「それから空白が少しあり (de nas stongs cung zad byung zhing)」と断り書きをしてから、以下の系譜が付加されている。『黄瑠璃史』 p. 259.22-24: mNga' ris pa rDo rje lhun grub → Sangs pa Ye shes bzang po → bKras lhun Grags pa dpal 'byor → Tshe brtan rgyal mtshan → Ngag dbang 'phrin las → Ngag dbang bkra shis → sGo mang bsTan 'dzin rgya mtsho (『黄瑠璃史』著作時の座主)。空白期間は「少し」ではなく、恐らくは16世紀を中心とする一世紀前後に及ぶものと推定される。

寺座主の系譜に見出されず、ナルタン寺所属であるか否か定かではない。その場合、第八代座主キョトウンから、第十四代座主ドゥウパシェーラブまでの間の五人のナルタン寺歴代座主は果たして本当にこの『四百論』の師資相承を受けなかったのかという素朴な疑問が生ずる。素直に解釈すれば、第八代座主キョトウンの時代に、ナルタン寺では『四百論』の師資相承は断絶し、第十四代座主ドゥウパシェーラブは、ナルタン寺の外部からその相承を受けたということになる。しかるに、例えば、第九代座主ニマギェルツェンは、第七代座主チム・ナムカタクと第九代座主キョトウンに師事して諸々の教誡を完全に聴聞したとされるが⁶⁵、その中に『四百論』は本当に含まれていなかったのであろうか。

同様に、『根本中論』の相承系譜①においては、ナルタン寺の学匠としては、第五代座主シャンから第七代座主チム・ナムカタクまでの三名とその直後にリクレルの名前が確認されるが、以下、歴代ナルタン寺座主の名前は見出されない。この場合、系譜上からは、ナルタン寺において『根本中論』の師資相承はリクレル以後断絶したように見えるが、実際には、それはそうではなく、リクレル以後も歴代ナルタン寺座主に伝承されてきたことが他の資料から確認される。例えば、第十三代座主クンガギェルツェンは、かのツォンカパに中観六理聚の聖言を伝授したことがケドゥプジェの『ツォンカパ大伝』に明記されており⁶⁶、その相承はナルタン寺の中観の助教授職 (dbu ma'i zur chos pa) に代々伝承されてきたものであった。それ故、リクレル以降も『根本中論』の相承はナルタン寺において断絶していなかったと見なす必要がある。その箇所にはツォンカパの師であるレンダワの中観の相承に対する言及も見られるので、後でレンダワの伝記資料と併せて紹介しよう。

このように、『四百論』や『根本中論』の相承は聴聞録の系譜上には確認できないが、少なくとも第十三代座主に至るまでは歴代ナルタン寺座主の間で綿々と存続していたと考えられる。もしこの想定が妥当であれば、このことは聴聞録に記載された相承系譜の信憑性に対して疑問を投ずるものである。

65 『カダム明灯史』 p. 505.1f.: ... mKhan chen mChims dang/ sKyo ston pa gnyis la gdams pa rnams rdzogs par gsan/

66 『ツォンカパ大伝』 pp. 33.14-34.3参照。この箇所は後でレンダワの伝記資料と併せて訳出検討する。

小結

以上、『シュチェン聴聞録』を資料として、サキヤ派に伝承された中観三論書、即ち、『根本中論』、『入中論』、『四百論』の相承系譜を紹介したが、そこからサキヤ派には以下の二つの大きな中観の学統が存在していたことが明らかになった。

1. パツァブ翻訳師に由来するサンプ系の学統（＝サンプ寺の学僧やナルタン寺歴代座主等を経由して14世紀後半にサキヤ派のヤクトウク・ロントウン師弟へ）
〔『根本中論』（系譜①）と『四百論』〕
2. パツァブ翻訳師に由来するタンサク系の学統（＝タンサク寺歴代座主を経由して14世紀後半にサキヤ派のロントウンへ）〔『根本中論』（系譜②）と『入中論』〕

この両系譜は共にパツァブ翻訳師に由来するので、その意味で《パツァブ系の学統》と総称されるが、端的にはチャンドラキールティの帰謬派説の学統である。そのうち、より純粋な意味でのパツァブ翻訳師の学統はタンサク寺を経由して伝えられたものであって、第一の学統はパツァブ系とサンプ系が混同したものと評すべきものである。なぜならば、ナルタン寺やシャル寺は、既に指摘したようにサンプ系の講説院を擁する寺院であり、その教学は基本的にはゴク翻訳師やチャパ等のサンプ系学者の学統に連なるものであったからである。⁶⁷ サンプ系の僧院を経由することで、その過程においてゴク翻訳師やチャパ等の解釈が混入したことは大いにあり得ることであり、全くない考えることはむしろ不自然である。このように、中観三論書の伝承においてナルタン寺とタンサク寺が主導的な役割を担ったことが相承系譜の分析から判明したことである。

他方、相承系譜には諸々の問題が潜在していることもまた明らかにされた。例えば、『根本中論』の系譜②や『入中論』の系譜では、歴代タンサク寺座主の名前が列举されていたが、第十二代座主パクトウン・シェーラプリンチェンの直後に、第二十二代座主マルトゥン・シヨンヌギェルツェンが位置付けられており、その間の十代もの座主名が欠落していることがタンサク寺座主の系譜と

67 ナルタン寺やシャル寺がサンプ系講説院を備えた僧院であることについては、西沢 2011, pp. 239-300 ; 2012, p. 5f. を参照。

比較照合することから判明した。それ故、この系譜は欠落を含んだ不完全なものとなさざるを得ない。

さらに、『四百論』の系譜では、ナルタン寺五代座主から第八代座主まで伝承されてから一度断絶して、第十四代座主の時代に再びナルタン寺に入ったことが示されているが、『ツォンカバ大伝』等の記述から、実際にはそのような断絶はなく、歴代ナルタン寺座主の間に相承は保持されてきたこともまた新たに明らかになった点である。このように聴聞録に見出される相承系譜は極めて単純化ないしモデル化されたものであって、実際の相承はもっと複雑に分岐し入り乱れていると考える必要がある。

このように、現行の相承系譜には種々の問題が潜在していることが明らかにされたが、サキヤ派の中観の学統を考える上で留意すべき点は、以上の系譜にはヤクトク・ロントゥン師弟以前のサキヤ派学者の名前が全く見出されないことである。少なくとも後代の聴聞録に依る限り、初期サキヤ派の学者達の存在感は皆無に近く、サキヤ派の中観の学統は十四世紀に至ってようやくヤクトク・ロントゥン師弟から始まったことを示唆している。この件については、後で伝記資料等の他の関連資料と照合しつつ総合的に検討することにしたい。

(4) 『入菩薩行論』の相承系譜⁶⁸

中観三論書の他にも中観の学統を考える上で無視できないのが『入菩薩行論』である。『シュチェン聴聞録』には、種々の系統の『入菩薩行論』の相承系譜が採録されているが、内容的に分析整理するならば、大凡以下の四つの系統に大別される。

- ①ゴク翻訳師・トルンバ系統
- ②アティシャ・ドムトウン系統
- ③ゴク翻訳師・シャンツェボンワ系統
- ④ゴク翻訳師・キュン系統

これにさらに、後三者から派生した三つの傍流の系譜が見出されるので、合計七つを数える。以下、順にその内容を紹介しよう。

68 『入菩薩行論』の相承系譜については、西沢 2011、pp.176-180において既に論じたが、以下はそれに対して加筆修正したものである。

①ゴク翻訳師・トルンパ系統の相承系譜

... rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab (1059-1109) → Gro lung pa Blo gros 'byung gnas → Cha pa Chos kyi seng ge (1109-1169) → [サキヤ派へ] Slob dpon rin po che bSod nams rtse mo (1142-1182, S2) → rJe btsun Grags pa rgyal mtshan (1147-1216, S3) → Sa skya paṇḍita (1182-1251, S4) → [チュールン衆へ] mKhan chen Byang chub dpal (1183-1264, C1) → mKhan chen bDe ba dpal (1231-1297, C2) → bKa' bzhi pa Grags pa gzhon nu (1257-1315, C3) → mKhan chen bSod nams grags pa (1273-1353, C4) → [サキヤ派へ] Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan (1312-1375) → Bla ma dPal ldan tshul khriṃs (1333-1399)⁷⁰ → Shar chen Ye shes rgyal mtshan (1359-1406)⁷¹ → Ngor chen rdo rje 'chang Kun dga' bzang po (1382-1456)⁷² → Mus chen dKon mchog rgyal mtshan (1388-1469) → Kun mkhyen bSod nams seng ge (i.e., Go rams pa, 1429-1489) ... (『シュチェン聴聞録』 p.142.2-4)

[注。系譜中のSはサキヤ五祖の祖代、Cは、チュールン衆 (Chos lung tshogs pa) の座主代を指す。]

この相承は、ゴク翻訳師に由来し、チャパを介してサキヤ派のソナムツェモ、タクパギェルツェン、サパン等に伝承されたものであり、端的にはサンブ寺の学者からサキヤ派の学者に直接に伝えられた相承である。ソナムツェモは、サ

69 Heimbel 2013, p.193によれば、チュールン衆 (Chos lung tshogs pa) の第三代座主であるのみならず、シャル寺 (Zha lu) の座主でもある。同註33には伝記情報として、『カダム明灯史』や『シャル寺統史』等の一連のテキストの関連箇所が示されている。『シャル寺統史』pp.360-365に彼の略伝が収録されている。

70 ペルデンツルティムは、ラマタムパの直弟子であり、『ラマタムパ伝』の著者でもある。21歳の年 (1353) にラマタムパを戒師として具足戒を受戒、26歳の年 (1358) にラマタムパの内弟子 (phyag phyi, 随従) となり、以後ラマタムパが逝去するまで、17年間師事した。その間、師の全ての法を聴聞したという (『ペルデンツルティム伝』pp.408, 409)。彼は道果説 (lam 'bras) の相承系譜において、ラマタムパの直後に位置付けられる。ペルデンツルティムの生涯と事績については、『ペルデンツルティム伝』を参照。

71 サキヤ派の学僧である。この人物の年代については、Heimbel 2013, p.197を参照。

72 ゴルチェン・クンガサンボの生涯と事績については、Heimbel 2011を参照。

キャ五祖の第二祖として知られているが、後述するように、チャパの直弟子の一人であり、彼の全集には『入菩薩行論』の註釈が含まれている⁷³。その奥書きにはチャパの『入菩薩行論』の註釈に対する言及が見られるので、チャパからソナムツェモへの師資相承の存在は疑いない。第三祖タクパギエルツェンもまた、『入菩薩行論』の要義 (bsdus don) を著しており⁷⁴、師にして実兄でもあるソナムツェモからの相承の存在はほぼ疑いなかろう。そして第四祖サパンは、『入菩薩行論』の註釈こそ残していないが、伯父のタクパギエルツェンを主要な師の一人として、菩薩行を主題とした『牟尼密意解明』という道次第の著作 (SK 5所収) を著している。サパンの相承については、後で彼の伝記資料を参照しつつ再検討することにしよう。

他方、サパンの直後に位置付けられているケンチェン・チャンチュプペルは、カシュミールパンディタ・シャーキャシュリーバドラ (Śākyaśrībhadra, 1127-1125 : 1122-1220)⁷⁵ の直弟子の一人であり、師が1214年 (1218年) にカシュミールに去った後、ツァンソワ・ソナムゼー (gTsang so ba bSod nams mrdzas) とドルジェペル (rDo rje dpal) と共に師が伝えた戒統 (mkhan brgyud) を保持する持戒者衆 (持戒者共同体) を組織した人物として知られている⁷⁶。「戒統」とは、授戒儀式において中心的な役割を担う戒師 (mkhan po, upādhyāya) が授戒対象である戒弟 (mkhan bu, 授戒弟子) に対して伝授した戒律の相承 (sdom brgyud) のことを云うが、シャーキャシュリーバドラがチベットに伝えた戒統は、前伝期においてシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) により吐蕃王朝に伝えられた戒統 (= 低地律, smad 'dul) と後伝期初頭においてダルマパーラ (Dharmapāla) によりガリ王朝に伝えられた戒統 (= 高地律, stod 'dul) と共にチベットの三大戒統の一つを形成するものである⁷⁷。

73 rJeb btsun bSod nams rtse mo, *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa*. SK 2, pp. 457-515 (1-116a6).

74 rJe btsun Grags pa rgyal mtshan, *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i bsdus don*. SK 4, pp. 334-344 (277a3-296a6).

75 シャーキャシュリーバドラの生没年については、諸説があるが、『青冊』(p. 1239) は1127-1225年を、『漢藏文書集成』(pp. 369, 371) では、1122-1220年を示す。但し、『漢藏文書集成』では、九十九歳の火卯年に逝去とあるが、鉄辰年の誤りである (同 p. 371.4)。

76 Heimbrel 2013, p. 190参照。

チャンチュブペルとドルジェペルは、それぞれ戒師シャーキャシュリーバドラから受け継いだ戒統を保持する持戒者集団を組織した。チャンチュブペルが創立したものが、ゲンドウンガン衆 (Tshogs dGe 'dun sgang) とチュールン衆 (Chos lung tshogs pa) の二集団、ドルジェペルが創立したものが、ツァミク衆 (Tsha mig tshogs pa) とチュヅイン衆 (Bye rdzing tshogs pa) の二集団であり、併せて「チョデン四部衆 (Jo gdan tshogs pa sde bzhi)」と総称する。⁷⁸ 彼らは、特定の宗派には属せずに出家希望者に授戒儀式を提供した持戒者集団であり、当時のチベット仏教界において隠然たる影響力を有していた。

このうちチュールン衆は、チャンチュブペルにより1225年頃に創立、当初は特定の寺院を持たなかったが、後に寺院を建立して定住するようになった。⁷⁹ プトゥンやラマタムパの具足戒の戒師を務めたのも歴代チュールン衆の座主であり、その影響力の一端を窺い知ることが出来る。⁸⁰

上記の『入菩薩行論』の相承系譜に立ち戻るならば、チャンチュブペル以下、ソナムタクパまでの四名の人物はこのチュールン衆の歴代座主に他ならない。このうち、デワペル (第二代)、タクパシヨヌ (第三代)、ソナムタクパ (第四代) の三名は、文殊からシャーンティデーヴァに伝承されたとされる《大波濤行の相承 (rlabs chen spyod rgyud)》を受け継ぐ道次第行者として『道次第相承伝』 (*Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar*) に記載されており、⁸¹ 確かに『入菩

77 チベットに上述の三系統の戒統があることは『青冊』に明記されるが (同 p. 1237)、その概要は袴谷 1989、p. 123f. に紹介されている。そのうちカダム派と低地律の関係については、羽田野 1955を参照。羽田野 1957にはシャーキャシュリーバドラの生涯と事績が解説されている。

78 このチョデン四部衆については、『青冊』では、第十五章「四部衆等の僧伽部が如何に起こったのか」 (同 pp. 123791249) において、シャーキャシュリーバドラの事績と共に解説されているが、このチョデン四部衆を諸史料を依用して包括的に論じたものとして、Heimbel 2013がある。本稿で特に関説するチュールン衆についても主に同論文に依拠する。チュールン衆座主の系譜は、同 p. 226f. 参照。

79 Heimbel 2013, p. 199参照。

80 例えば、プトゥンが二十三歳の年1312年に具足戒を受戒した際には、チュールン衆第三代座主タクパシヨヌが戒師、第四代座主ソナムタクパが軌範師、第五代座主ソナムサンポが密師を務め、受戒後、戒師と軌範師の両者から律関係の典籍や修心等を聴聞したことが知られている。『シャル寺統史』 p. 18.2-4: 『プトゥン伝』 9b6-10a7 (Ruegg 1966, p. 78f.) 参照。ラマタムパの戒師については後述する。

薩行論』の相承を保持することが伝えられている。さらに、この三名は、『カダム明灯史』においても、《修心 (blo sbyong)》の一相承に見出され⁸²、カダムの学統を保持する者でもある。そして、このうちの第四代座主ソナムタクパからサキャ派のラマタムパが『入菩薩行論』の相承を伝授されたとされるのである。

以上、サパンとラマタムパという二人のサキャ派学者を繋ぐ一連の人物達が特定の宗派に属しないチュールン衆という持戒者衆であることを確認した。この系譜の通りであれば、この『入菩薩行論』の相承はサパンの後でサキャ派においては一度断絶し、ラマタムパの時代にチュールン衆から再度導入されたことになる。しかるに、それが事実を反映している保証はない。委細は後述するが、チュールン衆初代座主であるチャンチュプベルがサパンと師弟関係にあったことは極めて疑わしく、また、戒師ソナムタクパは、ラマタムパに律典を教授したことは『ラマタムパ伝』から確認されるが、『入菩薩行論』をも伝授したことは少なくとも同伝には見出されない。実際にはサパン以後もサキャ派において『入菩薩行論』の相承は途絶えていなかったが、例えば、サキャ派の学統を権威付ける目的で、大波濤行の道次第論者であるチュールン衆の一連の学者達を意図的に系譜に挿入したという解釈も不可能ではないのである。

これに関連して一点注意を促しておきたいのは、サパンからチュールン衆へ伝承された後の相承系譜は、実は戒統 (mkhan brgyud) の系譜ともなっていることである。即ち、チュールン衆初代座主チャンチュプベルは第二代座主デワベルの具足戒の戒師 (mkhan po, upādhyāya) であり⁸³、デワベルは第三代座主タクパシヨヌと第四代座主ソナムタクパの戒師⁸⁴、ソナムタクパはラマタムパの戒師⁸⁵、ラマタムパはベルデンツルティムの戒師⁸⁶、イエシエギエルツェンはゴルチェン・クンガサンポの戒師⁸⁷、ゴルチェンはコラムパの戒師である⁸⁸。以上のこ

81 『道次第相承伝』 p. 839ff. 特に、同 pp. 843-849参照。

82 『カダム明灯史』 pp. 581-591参照。『道次第相承伝』に見出される彼らの略伝は、『カダム明灯史』のそれに多少の付加を加えた引き写しに過ぎない。

83 第二代座主デワベルは、二十歳の鉄戌年 (1250) に、IHo brag pa Byang chub dpal を戒師、Slob dpon bSod nams bzang po を軌範師、Slob dpon dBang phyug grags pa を密師として具足戒を受戒した。『カダム明灯史』 p. 581.12-17参照。

84 第三代座主タクパシヨヌは、十九歳の木亥年 (1275) に、bDe ba [dpal] を戒師、Slob dpon Thugs rje dpal bzang po を軌範師、Slob dpon Chos ldan dpal bzang po を密師として具足戒を受戒した。『カダム明灯史』 p. 583.5-10参照。他方、第四代座主

とは一連の伝記資料から確認される。⁸⁹このことは果たして偶然の一致なのだろうか。

ここで戒律とは菩薩戒ではなく、別解脱戒 (prātimokṣa, 波羅堤木叉) に他ならないので、『入菩薩行論』と特に密接な関係があるとは考え難い。たまたま『入菩薩行論』の相承系譜と戒統の系譜が一致しただけなのか、あるいは、もっと別の理由があるのか。この点は今後の検討課題として残しておく。

なおこの系譜には、サキヤ派教学の中興の祖であるラマタムパやサキヤ派教学の確立者であるコラムパの名が見出されるが、中観三論書の相承系譜に見られたようなヤクトウク・ロントウン師弟やシャーキャチョクデンの名前は登場していないことも留意される点である。これだけ見ると、中観三論書と『入菩薩行論』の四典籍のうち、ラマタムパやコラムパには『入菩薩行論』の相承だけが、ヤクトウク・ロントウン師弟やシャーキャチョクデンには中観三論書の

ソナムタクパは、十九歳の鉄卯年 (1291) に、mKhan chen bDe ba dpal を戒師、mKhan chen dKa' bzhi pa Grags pa gzhon nu を軌範師、Slob dpon gZhon nu dar を密師として具足戒を受戒した。『カダム明灯史』 p. 585.19-22 参照。

85 ラマタムパは、二十歳の鉄未年 (1331) に、Jo gdan tshogs pa'i mKhan chen bSod nams grags pa を戒師、mKhas mchog dPal ldan seng ge を軌範師、Bla ma bZang po を密師として具足戒を受戒した。『ラマタムバ伝』 p. 390.5f.; 『サキヤ氏族史』 (アメ造) p. 324.1 参照。

86 ベルデンツルティムは、二十一歳の年 (1353) に、Chos rje Bla ma dam pa を戒師、Chos rje Ri khrod pa を軌範師、Drung dkon mchog rgyal ba を密師として具足戒を受戒した。『ベルデンツルティム伝』 p. 408.2 参照。

87 ゴルチェンは、二十歳の年 (1401) に、Chos rje Ye shes rgyal mtshan を戒師、mKhan chen Blo gros dpal ba を軌範師、Chos rje 'Phags pa gzhon nu blo gros を密師として具足戒を受戒した。『ゴルチェン伝』 p. 488.1f. 参照。

88 コラムパは、二十六歳の木戌年 (1454) に、rDo rje 'chang chen po Kun dga' bzang po を戒師、Mus chen sems dpa' chen po bSod nams rgyal mtshan を軌範師、Kha 'phyar/char mkhan chen sems dpa' chen po bSod nams rgyal mtshan を密師として具足戒を受戒した。『コラムバ伝』 (アメ造) p. 187; 『コラムバ伝』 (ムチェン造) p. 4 参照。

89 Shar chen Ye shes rgyal mtshan の伝記は未見につきその戒師は不明である。但し Heimbel 2013, p. 197 によれば、1379年に、チョデン四部衆の一つである Tsha mig tshogs pa の座主 bKra shis tshul khriims から具足戒を受戒したとあるので、もし bKra shis tshul khriims を戒師としたのであれば、これは例外となる。

相承だけが伝承されたことになるが、それはあまりにも不自然である。実際、例えば、コラムバには、『根本中論』や『入中論』の註釈が残されているので、上記の相承系譜には現れないが、それらの相承が存在していたことは疑いない。この件については、これら一連の人物達の修学事情や著作と併せて検討する必要があるので、稿を改めて論ずることにしたい。

②アティシャ・ドムトゥン系統の相承系譜

... Jo bo rje dPal ldan Atiśa (982-1054) → 'Brom ston rGyal ba'i 'byung gnas (1004/5-1064) → Po to ba Rin chen gsal (1027-1105) → Sha ra ba Yon tan grags (1070-1141) → [ナルタン寺へ] gTum ston Blo gros grags (1106-1166, N1) → (I.) Gro ston bDud rtsi grags (1153-1232, N4) → Ze'u dgra bcom pa (N10)⁹⁰ [→ mKhan chen Grags pa shes rab (N11) ... [中略] ... [サキヤ派へ] 'Jam dbyangs shes rab rgya mtsho ...] (II.) ... dPal ldan Gro (alias, bDud rtsi grags) (N4) → mChims Nam mkha' grags (1210-1285, N7) → sKyi ston Shākya 'bum⁹¹ → sKyi ston 'Jam dbyangs → [チョナン派へ] Kun mkhyen Dol po pa (1292-1361) → [サキヤ派へ] Sa bzang Ma ti paṇ chen (1294-1376) → Sa bzang 'Phags pa gzhon nu blo gros (1358-1412/24) → Ngor chen rdo rje 'chang (1382-1456) → ... [Kun mkhyen bSod nams seng ge] (『シュチェン聴聞録』 p.143.1-3)

この系譜は、アティシャとドムトゥンの師弟に由来し、以下、ポトワ等のカダム・シュン派に伝承された相承である。ナルタン寺第四代座主トトゥン・ド

90 Ze'u dgra bcom pa 以下の括弧で補足した系譜は「以下同様 (man 'dra)」(同 p.143.2) といって省略されているが、直前の系譜にはその名前は見出されず、何を念頭に置いているのか定かではない。但し、後続の「③ゴク翻訳師・シャンツェンボンワ系統の系譜」にはこのセウ・ダチョムパの名前が見出され、以下、第十一代座主タクパシェーラブから歴代ナルタン寺座主に伝承され第十四代座主ドウツパシェーラブを介して、サキヤ派のジャムヤン・シェーラブギャンツォに伝承された系譜が紹介されている。ここではそれを念頭に置いたものと考えて補足しておく。

91 リクレルの弟子として『カダム明灯史』に記載されているので(同 p.522.13)、ナルタン寺の学僧である。但し、ここでは、sKyo ston Shāk 'bum と表記されている。

ウツイタクから分岐した二つの相承が記載されている。一つ（系譜（I.））は、ナルタン寺の創設者であるトゥムトゥン・ロトウタクパからナルタン寺に入り、以下、歴代ナルタン寺座主に伝承されたものである。具体的には、第四代座主 トトゥン・ドゥツイタクと第十代座主セウ・ダチョムパ（i.e., Ze'u Grags pa brtson 'grus）の二人の名前が挙げられているが、その間の系譜は明らかに欠落している。

他方、その直後に、セウ・ダチョムパの代わりにトトゥンからチム・ナムカタクに伝承された別系統の系譜（II.）も併記されているが、それはキトゥン・ジャムヤンからチョナン派のトルボパを介して、サキヤ派のササン・マティバンチェンに伝承されたものである。ゴルチェン以下は省略されているが、系譜①に明記されているように、コラムパへ伝承された。

③ゴク翻訳師・シャンツェボンワ系統の相承系譜

... rNgog lo Blo ldan shes rab → Zhang Tshe spong pa Chos kyi bla ma → Nyang brang pa Chos kyi seng ge ⁹² (sic) → gTsang nag pa brTson 'grus seng ge → [ナルタン寺へ] dPal ldan Gro mo che (alias, Gro ston bDud rtsi grags, N4) → Kun mkhyen mChims (N7) → Ze'u dgra bcom pa (N10) → mKhan chen Grags pa shes rab (N11) → mChims Blo bzang grags pa (N12) → Gro ston Kun dga' rgyal mtshan (N13) → mKhan chen Grub pa shes rab (N14) → [サキヤ派へ] 'Jam dbyangs Shes rab rgya mtsho → Ratna wardha ... (『シュチェン聴聞録』 p. 143.3-5)

シャンツェボンワはゴク翻訳師の四人の高弟の一人であり、弟子のニャンデンパと共に特に菩薩行論に通達したことで知られている。その後、この相承はツァンナクパを介して第四代座主ベルデン・トモチエの時代にナルタン寺に入り、以下、第十四代座主ドゥツパシェーラプまで歴代ナルタン寺座主の間で伝承され、十五世紀にサキヤ派のジャムヤン・シェーラプギャンツォに伝えられ

92 シャンツェボンワの弟子のニャンデンパは、通常、Chos kyi ye shes と表記される。

Chos kyi seng ge という表記は恐らく誤記であろう。『青冊』 p. 405.2f. 参照。

93 このシャンツェボンワとニャンデンパ師弟の事績や著作・学統等については、西沢 2011, pp. 173-180 参照

た。この人物はサパンの『論理学正理宝蔵』(*Tshad ma rigs gter*)の註釈を残しており、サキヤ派の分派の一つであるゴル派(Ngor pa)に所属することが知られている。⁹⁴

その直後には、ナルタン寺第四代座主ペルデン・トモチェからチョナン派のトルポパを介して、サキヤ派のササン・マティパンチェンに入った別系統の系譜が引かれているが(同 p.143.5-6)、この相承は、直前に紹介したアティシャ・ドムトゥン系統の第二の系譜(Ⅱ.)と一致するので、割愛する。ここから、このゴク翻訳師・シャンツェポンワ系統とアティシャ・ドムトゥン系統の系譜は、ナルタン寺に伝承された後はほぼ同内容の二系統の相承を共有していることが確認される。このことは、相承の歴史的事実を反映したものというよりも、単に同じ系譜を「使い回している」とでも表現すべきかもしれない。

④ゴク翻訳師・キュン系統の相承系譜

... rNgog lo → Khyung Rin chen grags → sTod lung rGya dmar ba →
 Cha pa Chos kyi seng ge → 'Dzad pa sTon skyabs⁹⁵ → Mus sras pa chen
 po → gTsang pa bSod nams mdzes → [チュールン衆へ] mKhan po Byang
 chub dpal ... [以下、系譜①と同様] ... [サキヤ派へ] Bla ma dam pa bSod
 nams rgyal mtshan (1312-1375) ... (『シュチェン聴聞録』 p.144.1-2)

キュン・リンチェンタクはゴク翻訳師の四大弟子の一人であり、弟子のギャマルワと共に中観と論理学に特に秀でた学者と伝えられている。その相承はギャマルワの直弟子であるチャバとその弟子筋の者達に伝承された。ツァンパ・ソナムゼーは、先に言及したシャーキャシュリーバドラの三人の戒弟のうちの筆頭に当たるツァンソワ・ソナムゼー(gTsang so ba bSod nams mdzes)⁹⁷に他ならない。彼から弟弟子にしてチュールン衆の創立者であるケンポ・チャンチュ

94 ジャムヤンシェーラプギャンツォの『論理学正理宝蔵』の註釈については、西沢 2011、p.361参照。

95 チャバの弟子筋に当たるサンブ系の学者である。『青冊』によれば、菩薩行論と阿毘達磨の多数の解説を為して、勝れた弟子が輩出したとある(同 p.407.8-10)。西沢 2011、p.217参照。

96 キュンとギャマルワの事績・著作・学統等については、西沢 2011、p.162-173参照。

プペルに伝えられた。以下先に紹介した系譜①と同様であり、チュールン衆第四代座主ソナムタクパからサキヤ派のラマタムパに伝承された相承である。

小結

以上、『入菩薩行論』の師資相承の四つの主要な系譜を紹介したが、それは端的には、(1) ゴク翻訳師に由来するサンプ系の学統と(2) アティシャに由来するカダム系の学統の二つに大別され、前者は、ゴク翻訳師の四大弟子のうち、トルンパとシャンツェボンワとキュンという三人の弟子達の学統に分派した。残りの四大弟子の一人であるデ・シェーラブバル ('Bre shes rab 'bar) は、般若学の分野で大きな業績を残したが⁹⁸、中観や菩薩行論の分野ではその相承を後代に受け継ぐ弟子が現れなかった模様であり、ここでは言及されていない。サキヤ派への伝承の経路を纏めるならば、以下の通りである。

1. ゴク翻訳師師弟に由来するサンプ系の学統 (系譜①③④)

①トルンパ系統：チャパから12世紀中葉にソナムツェモへ。

③シャンツェボンワ系統

- ・歴代ナルタン寺座主を介して14世紀末頃にジャムヤン・シェーラブギャンツォへ。
- ・トルボパを介して14世紀前半頃にササン・マティパンチェンへ。

④キュン系統：チャパの一連の弟子筋を介して14世紀前半頃にラマタムパへ。

2. アティシャ師弟に由来するカダム系統の学統 (系譜②)

- ・歴代ナルタン寺座主を介して14世紀末頃にジャムヤン・シェーラブギャンツォへ。
- ・トルボパを介して14世紀前半頃にササン・マティパンチェンへ。

この『入菩薩行論』と中観三論書の相承系譜とを比較した場合、顕著な特徴が幾つか見出される。例えば、中観三論書の相承系譜には、14-15世紀に現れ

97 この人物と表記については、Heimbel 2013, p. 190f. を参照。

98 デ・シェーラブバルの事績とその弟子達の般若学の学統については、西沢 2011, pp. 151-161を参照。

たヤクトック・ロントウン師弟以前にはサキャ派の学者は全く見出されなかったが、『入菩薩行論』の一連の系譜には、それ以前のサキャ派の学者達が登場している。特にゴク翻訳師・トルンバ系統の系譜①には、ソナムツェモ、タクバギェルツェン、サパン等の一連の初期サキャ派学者の名前が確認される。

また、『入菩薩行論』の一連の系譜には、中観論書の系譜に定型的に登場するヤクトック・ロントウン師弟やプトウン師弟、シャーキャチョクデン等の名前が見出されず、中観論書の系譜には、逆に、『入菩薩行論』の系譜に登場したトルポバとササン・マティパンチェン師弟、ラマタムパ、ゴルチェン、コラムバ等の一連の人物の名前が見出されない。このうち、少なくともコラムバは、『根本中論』や『入中論』の註釈を著作している⁹⁹ので、彼に伝受された中観の師資相承がなかったとは到底考え難い。この点を如何に解釈すべきかが問題となっている。

さらに、中観三論書のみならず、『入菩薩行論』の相承においても、特にナルタン寺の一連の学者が大きな役割を果たしたことが確認された。中観の相承系譜におけるナルタン寺の存在感は非常に大きなものがある。他方、中観三論書の相承系譜に登場した一連のタンサク寺座主の名前はこの『入菩薩行論』の相承系譜には見出されず、タンサク寺がバツァブ翻訳師に由来する中観帰謬派の学統を保持することを主とする寺であったことを示唆している。

2. 伝記資料に見出されるサキャ派の中観説の学統

(1) ソナムツェモの伝記資料

ところで、以上の一連の中観論書の相承系譜によれば、『入菩薩行論』を除き、サキャ派における中観の学統は、ヤクトック・ロントウン師弟に端緒を発することになるが、果たしてそれ以前にサキャ派において中観の学統は存在していなかったのかという疑問が当然のことながら生ずる。例えば、ロポン・ソナムツェモ (Slob dpon bSod nams rtse mo, 1142-1182) はチャパの高弟の一人として、サンブ寺でチャパに師事したことが知られているが、タクツァン翻訳師の『サキャ氏族史』所収のソナムツェモ伝ではその経緯を以下のように伝えている。

「この者 (=ソナムツェモ) は、七年間、父 (=サチェン・クンガニンポ) が

99 『コラムバ全集』第五卷 (ca 帙) にこれら一連の中観典籍が収録されている。

存命していたので、父の下で〔サキヤ派の〕深甚・広大な法を全て〔聴聞し〕、そして、その後、チャパ・チューキセンゲ (Cha pa Chos kyi seng ge) の下で中観と論理学 (dbu tshad)、弥勒の法 (Byams chos) 等をよく聴聞したので、顕教の法 (mtshan nyid kyi chos) に殊に通達した。良き法師であったので、〔チャパの弟子のうち〕「三公子 (jo sras gsum)」の一人とされた。チャパに黄金のゲンジラ (gser gyi 'gan ji ra) と『大品仏母經』(Yum rgyas pa, i.e.『十万頌般若經』) 等を寄贈し、多くの供養を行なうことで、歓待なされた」(『サキヤ氏族史』(タク造) p. 28.4-6)

これによれば、ソナムツェモは、チャパの下で「中観と論理学、弥勒の法等」を聴聞したとされるので、チャパからソナムツェモに伝えられた中観の相承の存在を想定することが出来る。これは聴聞録には明記されていないが、無視できない情報である。現行のソナムツェモ全集には中観典籍は収録されていないが、『入菩薩行論』の註釈 (SK 2所収) が残されており、その第九章から彼の二諦説に関する見解を回収することが出来る。同書の奥書きにはチャパに対する言及が見られるので、チャパからソナムツェモに伝えられた『入菩薩行論』の相承が存在していたことには疑問の余地はない。実際、これは先に紹介した一連の『入菩薩行論』の相承系譜のうち、①ゴク翻訳師・トルンパ系統の系譜に確認されるところである。あるいは、ソナムツェモの全集に『入菩薩行論』の註釈が収録されており、その奥書にチャパの註釈に対する言及が見られるからこそ、後代の或る者は『入菩薩行論』の相承系譜を作成するさいに、チャパ→ソナムツェモという相承を組み入れたとも解釈できる。実際この相承系譜が如何なる形で後代に伝承されてきたのかは定かではない。師から弟子へと口伝えて伝承されたのか、あるいは、文書として作成されて伝承されたのか。詳しいことは分かっていないのである。

このソナムツェモの中観の学統は、実弟のジェツウン・タクパギエルツェン (rJe btsun Grags pa rgyal mtshan, 1147-1216) に受け継がれた。彼には、『入菩薩行論』の要義 (bsdus don) (SK 4所収) が残されているほか、特に中観に関する見解は、彼の『タントラ現観』(rGyud kyi mngon rtogs¹⁰⁰) という著作に見出される。この著作は基本的には密教論書に属するものであり、聖者流の究竟次第を扱った『五次第』(Pañcakrama) に見られる《双入説 (zung 'jug, yuganaddha)》を至上の見解とする著作であるが、双入説に至る思想的階梯を形成するものと

して中観説を始めとする顕教の諸学説が詳しく論じられている。タクパギエルツェンは甥のサパンの主要な師の一人であり、初期サキャ派における中観説の学統として、チャパ→ソナムツェモ→タクパギエルツェン→サパンという系統を想定することが出来る。

(2) サパンの伝記資料

サパンは、¹⁰¹伯父のタクパギエルツェン以外にも、カシュミールパンディタ・シャーキャシュリーバドラを始めとする種々の師に師事したことが知られているが、その中で注目すべきはツルトウン・シヨンスセンゲに師事し論理学や中観を修学したことである。ツルトウンは、先に取り上げた一連の相承系譜のうち、『根本中論』や『四百論』の系譜に登場したが、サンプ寺のツァンナクパの直弟子であり、論理学綱要書『論理学智慧灯明』(*Tshad ma shes rab sgron ma*)の現存が確認されている。¹⁰²ツルトウンの下でのサパンの修学事情についてサパン伝を資料として紹介しておくならば、例えば、サパンの直弟子の一人であるロパクンケン・リンチェンペル (lHo pa kun mkhyen Rin chen dpal) はこう解説している。

「それから、ニヤントウ (Nyang stod) に赴き、善知識ツァンナクパ・ツウンドゥセンゲと云う者とその弟子の流儀を保持する正理を語る偉大な者キャンドウルワ・シヨンスセンゲ (rKyang 'dur ba gZhon nu seng ge) と云う者に供奉し、[講義を] 請願して、『量決択』と、尊師チャンドラキールティの密意である『中観明句論』(*dBu ma Tshig gsal, Prasannapadā*) と、ジャヤーナンダ (Dza ya ānanda, i.e., Jayānanda) により著作された『タルカの槌』(*rTog ge'i tho ba, Tarkamudgara*, D 3869) と云われるものを聴聞し理解なされた。」(『サパン伝』(ロバ造) 48b5-6)

ここからサパンはツルトウンの下で、『根本中論』を『明句論』と併せて聴聞

100 *rGyud kyi mngon par rtogs pa Rin po che'i ljon shing shes bya ba bshugs so*. In: SK 3, pp. 1-70.

101 サパンの生涯と事績については、ジャクソンの先駆的な研究 (Jackson 1987, pp. 15-37) があるほか、西沢 2011, pp. 328-346においても特に修学事情に焦点を当てて詳しく検討したので、参照されたい。

102 同書は、Pascale Hugon により校訂出版されている (Hugon 2004)。

し、他にもジャヤーナンダの『タルカの槌』を学んだことが確認される。ジャヤーナンダは『入中論』の註釈を著した人物であり、サパンがツルトゥンから修学した中観説は帰謬派系統のものであったことは疑いない。先に紹介した『根本中論』の相承系譜には、ツルトゥンの相承を受けた人物としてマチャ・シャーキャセンゲ (rMa bya Shākya seng ge) という人物が挙げられていた他、サパンの名前は見出されないが、実際にはツルトゥン→サパンという相承が存在していたことがサパン伝の記述から判明する。

他にも、チャパの「八大獅子」と称せられる筆頭弟子の一人にしてチャパの後任として第七代サンプ寺座主を務めたツェク・ワンチュクセンゲ (rTsegs/brTsegs/rTsags/Tsags dBang phyug seng ge) からサパンはサンプ系の教学を修学している。

「それから、ツェクパ・ワンチュクセンゲ (brTsegs pa dBang phyug seng ge) から、弥勒の五法、中観六理聚、自他の種々の教義の設定、毘婆娑師と経量部等、唯識と中観の主張方法、他にも、深甚な口訣を大部分聴聞した。」(『サパン伝』(ヤルルン造) 33b1-34a1)

このツェクの中観の系統の委細は不明であるが、チャパの弟子であるので、チャパ系統の中観説の保持者であると考えるのが自然であろう。無論、チャパの弟子の中にもツァンナクパやマチャのようにチャパが批判したチャンドラキールティの中観説に随順する者も現れたが、ツェクに関しては特にそのような言及は見られないので、チャパ同様に中観自立東方三論(『二諦分別論』、『中観莊嚴論』、『中観光明論』)に立脚した中観説を保持するものと考えておきたい。実際、ロパクンケンは、ツェクを「チャパ・チューキセンゲの教説の伝統を保持する者 (Phywa pa Chos kyi seng ge'i gsung rab kyi sgros 'dzin pa)」(『サパン伝』(ロバ造) p.102.3) と表現している。

また、『入菩薩行論』のゴク翻訳師・トルンパ系統の相承系譜には、チャパからソナムツェモ、タクパギエルツェン、サパンに伝授された相承が確認されたが、サパンからその相承を受け継いだ人物としてチュールン衆の初祖チャンチュプベルが挙げられていた。しかるに、サパン (1182-1251) とチャンチュプベル (1183-1264) の間に本当に師弟関係が成立していたか否かは定かではない。マントウ・ルードゥプギャンツォ (Mang thos Klu sgrub rgya mtsho, 1523-1594-?) の『マントウ仏教史年表』やサンギェブンツォク (Sangs rgyas phun tshogs,

1649-1705)の『ゴル仏教史補遺』(1692年造)には、サパンの弟子一覧が掲載されているが、そこには「十三人の老戒弟 (sdom phrug bgres pa bcu gsum)」という一連のサパンの戒弟の名前が¹⁰³列挙されている。そこには、サパン伝を記したロパクンケンやシャン・ドデベル (Zhang mDo sde dpal) の名前と並んで、チョデン・チャンチュブペル (Jo gdan Byang chub dpal) の名前が確認されるので、サキャ派の伝統においてチャンチュブペルをサパンの弟子と見なす解釈が存在していたことは確かである。但し、これについては以下のような但し書きが付されている。

「チョデン・チャンチュブペル (Jo gdan Byang chub dpal) は、法主 (Chos rje pa, i.e., Sa pan) の弟子の最たるものである。[しかるに、チャンチュブペルは] カシュミールパンディタの戒弟 (mkhan bu) であるので、法主の戒弟 (sdom phrug) としては些か妥当ではないように見える。しかしながら、ジェ・クンケンのティーカー (rJe Kun mkhyen gyi tikka) の通りに「法主の弟子に」数え入れたのである。」(『マントウ仏教史年表』p. 308.7-10; 『ゴル仏教史補遺』p. 318.5-7)

ここで著者は、チャンチュブペルがサパンの弟子の最たるものと云いつつ、直後でその戒弟であることに疑念を提示している。実際、ここに明記されているように、チャンチュブペルの戒師はシャーキャシュリーバドラであるので、¹⁰⁴サパンの戒弟ではあり得ない。典拠として言及された「ジェ・クンケンのティーカー」が何を指すのか不明であるが、チャンチュブペルがシャーキャシュリーバドラの戒弟である以上、彼をサパンの戒弟と見なす見解は明らかに虚偽である。実際サパンとチャンチュブペルは一歳しか違わず、『マントウ仏教史年表』や『ゴル仏教史補遺』の記述を除けば、チャンチュブペルがサパンに師事したことを示す文献は確認できていない。恐らくこれは、チョデン四部衆の創立者の一人としてのチャンチュブペルの権威を利用して、サパンの事績を顕彰する目的で後代に創出されたフィクションであり、史実ではないと推定される。

その場合、その当然の帰結として、先に紹介した『入菩薩行論』の相承系譜

103 『マントウ仏教史年表』pp. 306-309; 『ゴル仏教史補遺』pp. 316-319参照。そこでは、十三名と云いつつ、実際には十一名しか記されていない。『マントウ仏教史年表』では傍註に「二人欠落 (gnyis chad)」と記されている。

104 このことは他の史料からも確認される。Heimbel 2013, p. 193f. 参照。

において、サパンとラマタムパという二人のサキヤ派の学者の間に、チャンチュプペル等の四代のチュールン衆歴代座主が介在していることもまた史実ではないと考える必要がある。前述したように、チャンチュプペルを除いた三名の座主はシャーンティデーヴァに由来する《大波濤行の相承》を受け継ぐ高名な道次第行者であるので、サキヤ派の『入菩薩行論』の相承に対する権威付けのために彼らの名前を意図的に相承系譜に挿入した可能性がある。もしこの想定が妥当であれば、この相承系譜は、史実を忠実に再現したものではなく、虚構ないし創作に過ぎないことになる。

以上、サパンの伝記資料を使用して、聴聞録の相承系譜の妥当性について検証した。その結果、サパンには『入菩薩行論』のみならず、サンブ寺のツェク・ワンチュクセンゲやツルトウン・シヨンヌセンゲから中観の相承を受けていたことが確認された。このことは中観三論書の相承系譜には現れていない点である。さらに、『入菩薩行論』の系譜①に見られたサパンとチュールン衆初祖チャンチュプペルの師弟関係は史実ではなく、チャンチュプペル以下三名の歴代チュールン衆座主の名前はサキヤ派の『入菩薩行論』の相承系譜を権威付けるために挿入された可能性が強いことを指摘した。そこで次に、このうちの後者の懸案に関連して、チュールン衆第四代座主ソナムタクバから『入菩薩行論』の相承を受けたとされるラマタムパの伝記資料の側からもその点を検討しておこう。

(3) ラマタムパの伝記資料

後代サキヤ派の学統は、ヤクトック・ロントウン師弟というサキヤ派主流の学統と、ニヤウン・レンダワ師弟からゲルク派へ至る傍流の学統の二つに分裂したが、その分岐点に立つ人物がこのラマタムパ・ソナムギェルツェンである。¹⁰⁵そのラマタムパに『入菩薩行論』の相承を授けたとされるチュールン衆第四代座主ケンチェン・ソナムタクバ (1273-1353, 在位1315-1342) は、ラマタムパの直弟子ベルデンツルティム (dPal ldan Tshul khriims, 1333-1399) の『ラマタムパ伝』¹⁰⁶

105 この点は、『量評釈』の相承系譜の分析から判明した。それについては西沢 2013、p. 104f. 参照。

106 ラマタムパの略伝と著作、思想等については Kuji 1993；西沢 2011、pp. 373-399 を参照。

によれば、ラマタムパが二十歳の年(1331)に具足戒を授けた戒師でもある。¹⁰⁷ラマタムパは受戒後に、このケンチェン・ソナムタクパや同第五代座主ケンチェン・ソナムサンポ (mKhan chen bSod nams bzang po, 1291-1356, 在位1342-1351) から『根本律経』(‘*Dul ba mdo rtsa, Vinayasūtra*, D 4117) や四部律典 (Lung sde bzhi)¹⁰⁸ 等の律の経論を修学したことを『ラマタムパ伝』は伝えている。¹⁰⁹しかるに、それ以外に同伝にはラマタムパがソナムタクパから『入菩薩行論』を聴聞したという記述は見出されない。ラマタムパには『入菩薩行論』の註釈が残されているが、¹¹⁰その奥書きには、残念ながら、師事した師匠の名前は記されておらず、聴聞録が伝えるようにラマタムパがソナムタクパから『入菩薩行論』の相承を受けたことを示す証拠は『ラマタムパ伝』には見出されない。

他方、ソナムタクパの伝記資料に目を転ずるならば、彼はチュールン衆第二代座主デワペルを戒師、第三代座主カーシパ・タクパションヌを軌範師として具足戒を受戒した後、この両師から『現観莊嚴論』の偈註、『根本律経』及びチャドウルワ (Bya ‘dul ba, i.e., Bya ‘dul ‘dzin brTson ‘grus ‘bar)¹¹¹ の註釈 (Bya ‘tik)、¹¹²『阿毘達磨集論』のほか、『入菩薩行論』を聴聞していることが分かる。他にも、ロボン・ソナムイエシェ (Slob dpon bSod nams ye shes) から一連の律典の他、『明句論』と『入中論』、『中観莊嚴論』と『中観光明論』と『二諦分別論』、『集学論』と『入菩薩行論』などを聴聞している。¹¹³それ故、ソナムタクパに歴代チュールン衆座主に伝承されてきた『入菩薩行論』の相承が保持されていたこと

107 『ラマタムパ伝』 p. 390.5f. 参照。

108 『律本事』(‘*Dul ba lung gzhi, Vinayavastu*, D 1) 『律分別』(‘*Dul ba lung rnam ‘byed, Bhikṣuvīnayaṅgīyavibhaṅga*, D 5) 『律 雑 事』(‘*Dul ba lung phreng tshogs, Vinayakṣudrakavastu*, D 6) 『律上分』(‘*Dul ba gzhung dam pa, Vinayottaragrantha*, D 7) の四つの律経のこと。

109 『ラマタムパ伝』 p. 391.2参照。

110 ラマタムパには以下の二つの『入菩薩行論』の註釈が知られている。(1) *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i bsdus don gyi 'grel pa Nyi ma'i 'od zer*; (2) *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i rnam par bshad pa dGongs pa nges par gsal ba*.

111 チャドウルワについては、西沢 2011、p. 212参照。

112 『カダム明灯史』 p. 586.1-5; 『道次第相承伝』 p. 846参照。

はほぼ疑いない。しかしそのことは直ちにラマタムパがソナムタクパから『入菩薩行論』の相承を受けたことを意味する訳ではない。それはせいぜい一つの可能性の域に留まっている。

『ラマタムパ伝』には『入菩薩行論』の修学に関する明確な言及は見られないが、例えば、パン翻訳師ロトゥテンパ (dPang lo tsā ba Blo gros brtan pa, 1276-1342) から、「中観関係 (dbu ma skor)、般若、論理学、俱舎の三つ (phar tshad mngon gsum)」など一連の顕教典籍を多数聴聞したことが記されている。パン翻訳師は、ラマタムパの五大師匠¹¹⁵の一人として知られているが、特に顕教関係では最も重要な師である。後代のアメ・ガワンクンガソナム (A mes Ngag dbang kun dga' bsod nams, 1597-1659/60) の『サキヤ氏族史』にはラマタムパの修学事情に関してより詳しい記述が見られるが、ラマタムパはパン翻訳師からシャーンティデーヴァの『集学論』¹¹⁶を聴聞したとされる。同書には『入菩薩行論』への直接的な言及は見られないが、パン翻訳師から『集学論』のみならず、『入菩薩行論』をも修学した可能性はある。

他に注目すべき人物としては、プトウンとギェルセ・トンメサンポ (rGyal sras Thogs med bzang po, 1295-1369)¹¹⁷を挙げる必要がある。ラマタムパがプトウンから修学したのは密教経論が主であったが、プトウンには『入菩薩行論』¹¹⁸の註釈が残されているので、伝記資料には明記されていないが、プトウンから『入菩薩行論』¹¹⁹を聴聞した可能性は否定できない。また仮に直接に聴聞することはなかったとしても、ラマタムパが『入菩薩行論』の註釈を著すに際して、

113 『カダム明灯史』 pp. 586.21-587.13: 『道次第相承伝』 p. 847参照。

114 『ラマタムパ伝』 p. 392.4-6参照。

115 具体的には、(1) ニエンチェン・ソナムテンパ (Nyan chen bSod nams brtan pa)、(2) ロンパ・シェーラプセンゲ (Rong pa Shes rab seng ge)、(3) パン翻訳師ロトゥテンパ (dPang lo Blo gros brtan pa)、(4) チェンポ (=兄)・ジャムヤントウンユーギェルツェン (gCen po 'Jam dbyangs don yod rgyal mtshan)、(5) ヤブ (=父)・ダンニーチェンポ (Yab bdag nyid chen po, i.e., bDag chen bzang po dpal ba) の五人である。『サキヤ氏族史』(アメ造) p. 343参照。

116 『サキヤ氏族史』(アメ造) p. 325.5参照。

117 『カダム明灯史』 pp. 591-605に比較的詳しい略伝が記載されている。

118 『ラマタムパ伝』 p. 392.5f.: 『サキヤ氏族史』(アメ造) p. 331.2-6参照。

119 プトウンには以下の二つの『入菩薩行論』の註釈が知られている。(1) *Byang chub*

プトゥンの註釈を参照していた可能性は極めて高い。

他方、ギェルセ・トンメサンポからは、*Khams gsum rnam rgyal* の灌頂等の顕密の多数の聖言を聴聞したとされる¹²⁰。その具体的な修学内容について定かではないが、トンメサンポは道次第や修心、菩薩行論等に非常に通達した人物として知られており、『入菩薩行論』を講義した際には花の雨が降ったと伝えられている程である。彼にも『入菩薩行論』の註釈が残されているので、ラマタムパの『入菩薩行論』の学統を検討する際には、プトゥンやトンメサンポらの註釈と比較対照すること作業が必要となる。

以上、ラマタムパの『入菩薩行論』の修学事情を『ラマタムパ伝』や『サキヤ氏族史』等を史料として検討した。そこではチュールン衆第四代座主ケンチェン・ソナムタクパは、ラマタムパに具足戒を授けた際に、併せて律の経論を教授したが、『入菩薩行論』をも教授したか否かは確認されなかった。但しそれを否定する論拠もないことも確かなので、この点については現時点ではあくまで可能性の域に留まっているとしか言えない。ラマタムパの『入菩薩行論』の学統については、伝記資料や史書から得られる外的な情報には限界があるので、後はテキスト自体を解説して、プトゥンやギェルセ・トンメサンポ等のラマタムパの周辺の人物達の『入菩薩行論』の註釈と比較対照することを通じて検討する以外に方法はない。それは稿を改めて検討することにする。

なおラマタムパの中観の修学事情については、先に言及したように、『ラマタムパ伝』では、パン翻訳師から「中観関係」(同 p. 392.4) を聴聞したと記す以外、具体的な修学内容については触れるところがないが、アメシャブの『サキヤ氏族史』にはもう少し具体的な解説が見られるので、引いておこう。

「また大翻訳師パン・ロトゥテンパ (Lo tsā ba chen po dPang Blo gros brtan

sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i bsdus don; (2) Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa Byang chub kyi sems gsal bar byed pa Zla ba'i 'od zer. 前述したラマタムパの二つの『入菩薩行論』の註釈はそれぞれこのプトゥンの二つの著作の註釈である可能性がある。

120 『ラマタムパ伝』 p. 392.6 ; 『サキヤ氏族史』 (アメ造) p. 332.1 参照。

121 『カダム明灯史』 p. 594.20f. 参照。

122 *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa Legs par bshad pa'i rgya mtsho.*

pa) の下で、御年十九歳の時 (1330) に、吉祥なるサキヤのセンゲガン前宮 (dPal ldan Sa skyai Seng ge sgang gyi mdun gyi khab) という或る精舎にて、兄、ジャムヤントウンユーギェルツェン (gCen 'Jam dbyangs don yod rgyal mtshan) と二人で『阿毘達磨集論』の解説と聖言 (bshad bka') と、他にも聖者龍樹の讃歌集 (bsTod tshogs) 等と、御年二十一歳の時 (1332) には、リンチェンガン宮 (Rin chen sgang bla brang) において、龍樹によって著作された『根本中論』とその語句の註釈 (tshig gi 'grel pa) である『明句論』と知られたものと、内容の註釈 (don gyi 'grel pa) であるチャンドラキールティによって著作された『入中論』及びその自註と、アーリヤ・デーヴァにより著作された『四百論』及びその註釈等の中観の全ての学説と、他にも、… [中略] …を聴聞なさり、…」(『サキヤ氏族史』(アメ造) pp. 324.4-325.2)

ここには、ラマタムパが二十歳前後の時に、パン翻訳師から中観三論書を全てその註釈と共に聴聞したことが記されている。果たしてパン翻訳師から本当にこの中観三論書を全て聴聞したか否かは定かでないが、少なくとも何らかの中観論書を修学したことは事実と考えられる。実際、直後に紹介するように、レンダワはラマタムパに師事して中観を聴聞する意図があったが、それが適わなかった旨が『レンダワ伝』に明記されているので、ラマタムパが何らかの中観の相承を保持していたことは疑いないからである。『シュチェン聴聞録』所収の中観三論書の相承系譜にはラマタムパの名前は見出されないが、実際には、パン翻訳師→ラマタムパという相承が存在していたと考えてよからう。この学統は、チャンドラキールティの中観説を伝えるものであるので、パツァブ翻訳師由来の相承かと思われるが、委細は不明である。パン翻訳師の伝記資料に遡って検討する必要があるが、それについては稿を改めて論ずることにしたい。

このようにラマタムパが中観を修学したことはほぼ疑いない事実と思われるが、2016年に活字本の形で出版されたラマタムパ全集¹²³には『入菩薩行論』の註釈は含まれているが、中観関係の著作は収録されていない。アメシャブの『サキヤ氏族史』には、以下の一連の中観関係の小品の註釈を著したことが伝えら

123 *Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan dpal bzang po'i zhabs kyi gsung 'bum*. 26 vols., Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2016.

れているが、その現存は確認されていないのである。

*Rigs pa drug cu pa/ sTong nyid bdun bcu pa/ rTsod pa bzlog pa/ Zhib
mo rnam dag rnam la ti ka sa bcad dang bcas pa re re* 『六十頌如
理論』、『空七十論』、『廻諍論』、『広破論』に対する各々の註釈及び科文
(『サキヤ氏族史』(アメ造) p.344.3f.)

これは翻訳師チャンチュプツェモ (Lo tsā ba Byang chub rtse mo) のラマタム
パの伝記に既に記載されており、¹²⁴『アク稀観書目録』(MHTL nos. 11351-11354)
にも転載されている。仮にもしこの情報が正しいであれば、このラマタムパの
一連の註釈は、サキヤ派教学史において中観論書に対する最も初期の註釈の一
つとして注目に値する。しかしながら、肝心の『根本中論』等の中観三論書に
対する註釈は見出されず、中観三論書に対する註釈は、次のレンダワに委ねら
れることになった。

(4) レンダワの伝記資料及びその他の関連文献

レンダワ・シヨヌロトゥ (Red mda' ba gZhon nu blo gros, 1349-1412)¹²⁵ は、十
四世紀のサキヤ派教学の形成に一定の寄与を為したのみならず、ツォンカパの
師としてゲルク派の教学形成に大きな役割を果たした重要な人物である。しか
しながら、レンダワの学統はサキヤ派教学史においては傍流に当たり、それ故、
ヤクトック・ロントゥン師弟を基軸とするサキヤ派の主流の学統を記すサキヤ
派の聴聞録にはその名は殆ど見出されない。実際、先に紹介した中観三論書や
『入菩薩行論』の相承系譜にはレンダワの名前は登場しなかった。¹²⁶ レンダワの

124 チャンチュプツェモのラマタムパの伝記は筆者未見。その著作リストは、
Kuijp1993, pp. 115-118に転写されており、それに基づく。ラマタムパの著作について
は、Kuijp 1993, 2018に詳しい。西沢 2011, p. 375f. 参照。

125 レンダワの略伝は、『カダム明灯史』(pp. 611-617)；『道次第相承伝』(pp. 891-905)
に収録されているほか、直弟子のソナムツェモが記した大部の伝記(『レンダワ伝』)
が残されている。Roloff 2009は、この『レンダワ伝』のテキスト校訂及び訳注研究で
ある。それらを資料としてレンダワの生涯と著作、学統等を論じたものに。西沢 2011、
pp. 381-399がある。

126 他にも、ゲルク派の聴聞録には、『量評釈』の相承系譜にレンダワの名前は見出さ
れるが、サキヤ派の聴聞録には見出されない。サキヤ派及びゲルク派における『量評
釈』の相承系譜については、西沢 2013, pp. 96-105参照。

名前が見出されるのは、むしろゲルク派の聴聞録においてである。例えば、ケードゥプジェの聴聞録には、ツォンカパが中観六理聚の聖言を受けたナルタン寺第十三代座主クンガギエルツェンからツォンカパに伝承された相承と、それとは別にレンダワから伝承された二つの相承の系譜を記載している。そのうち後者についてはこう解説している。

「また法眼を有する者、ジェツウン・レンダワ・チェンポ (rJe btsun Red mda' ba chen po) から『根本中論』及びその註釈である『明句論』の解説と、『四百論』及びその註釈の解説と、『入中論』の解説と、『法界讃』(Chos dbyings bstod pa, Dharmadhātustava, D 1118) の解説と、『親友書簡』(bShes pa'i sprin yig, Suhṛllekha, D 4182, 4496) の解説を受けた相承は、ジェツウン (=レンダワ) がサキヤのタンモチェ寺座主で〔中観の〕法を知る老師 (Sa skya Grang mo che'i gdan sa pa bla ma chos she (sic) bgres po) から聖言を聴聞し、他方、彼 (=その老師) はナルタン寺のシェルセン (sNar thang pa Sher seng, i.e., Shes rab seng ge) から聴聞し、彼 (=シェルセン) もまたギャンロ・パンチェン (rGyang ro paṇ chen) から聴聞し、以下、同上であるようである。」(『ケードゥプ聴聞録』5a3-5)

この直前には中観六理聚の相承系譜が引かれているが、「同上」の部分はそれを受けている。その省略部分を補足して示すならば、以下の通りである。

[... Pa tshab lo tstsha ba Nyi ma grags → rMa bya Byang ye/¹²⁷ gTsang pa Sa sbas/ Zhang Thang sag pa/ Kku ston mDo sde 'bar → [サンブ寺へ] rMa bya Byang brtson → 'Tshur (/mTshur) gZhon seng → rMa bya Shāk seng → [ナルタン寺へ] mChims Nam mkha' grags (1210-1285, N7) → sKyo ston sMon lam tshul khirms (1219-1299, N8) →]

127 バツァブ翻訳師からここに列挙した四者が聴聞し、この四名からマチャ・チャンチュブツウンドゥが聴聞したとされる。

128 『ケードゥプ聴聞録』には、この直前にこれとは別系統の中観六理聚の相承系譜が提示されているが、それには、レンダワではなく、ナルタン寺座主クンガギエルツェンからツォンカパに伝承された相承が示されている。ギャンロ・パンチェンまで共通するので、それ以下の部分を参考までに挙げておく。 ... rGyang ro paṇ chen → mChims Blo bzang grags pa → sNar thang mkhan chen Kun dga' rgyal mtshan → Thams cad mkhyen pa Blo bzang grags pa → mKhas grub rje

rGyang ro paṇ chen ¹²⁹ → sNar thang pa Sher seng (i.e., Shes rab seng ge, read: Byang chub seng ge?) → Sa skya Grang mo che'i gdan sa pa bla ma chos she (sic) bgres po (i.e., mDog lod mkhan chen Kun dga' dpal ba?) → **Red mda' ba** (1349-1412) → mKhas grub rje(1385-1438)
 (『ケードゥップ聴聞録』 4b4-5a5)

ここでレンダワに中観六理聚の聖言を伝えた人物として、Sa skya Grang mo che'i gdan sa pa bla ma chos she bgres po ¹³⁰が挙げられているが³、この人物は、同じくケードゥップジェにより著された『ツォンカパ大伝』では、Brang mo che'i gdan sa pa bla ma chos bshes pa ¹³¹と表記されている。チャハル・ゲシエ (Cha har dge bshes Blo bzang tshul khriṃs) はこの bla ma chos bshes pa という語を人名と解して、bla ma chos kyi bshes gnyen pa (ラマ・チューキシエ・ネンパ) と換言しているが¹³²、後述するように、『レンダワ伝』やレンダワ自身が提示した中観の見解の相承系譜には、彼の中観の師としてそのような名前は見出されない。『ケードゥップ聴聞録』には、この語に対して「年老いた (bgres pa)」という形容詞が付されていることと併せて鑑みるに、この chos bshes pa/ chos she という語は、chos shes pa (法を知る者) という語の誤記と解釈すべきかと思われる。即ち、ここでケードゥップジェは人名を挙げているのではなく、「サキヤのタンモチエ寺 (Grang/Brang mo che) 座主で [中観の] 法を知る老師」からレンダワは中観の聖言を授かったと述べているのである。ケードゥップジェは、『ツォンカパ大伝』においても、レンダワの中観六理聚の相承をツォンカパのそれと併せて解説しているので、参考までに挙げておこう。

「[ツォンカパは] 中観六理聚全ての聖言 (lung) をナルタン寺のケンポ・クンガギエルツェン (sNar thang mkhan po Kun dga' rgyal mtshan) から授

129 この人物は、『カダム明灯史』では、第七代座主チム・ナムカタクの弟子として、キェルナク・タクパセンゲヤリクレルと共に挙げられている (同 p. 504.9)。

130 底本としてクンブム版以外にも、タシルンポ版とシヨル版も同じ読みを示す (bKra lhun ed. 3b7 ; Zhol ed. 4b3)。

131 『ツォンカパ大伝』 p. 33.19f. 参照。これはクンブム版によるが、ツォンカパ全集の三本の版本は皆同じ読みを示す (sKu 'bum ed. 18b1 ; bKras lhun ed. 18a3 ; Zhol ed. 18a3)。

132 『ツォンカパ伝』 (チャハル造) p. 119.3参照。

かった。彼(＝クンガギエルツェン)は、「[現在の] 自分の筆頭助教授(zur chen, i.e., bla chos pa?)の地位は、以前には中観の助教授(dbu ma'i zur chos pa)の地位としてあったものなので、[中観六理聚の相承は] そこから伝承されたものである」と仰り、デワチェン¹³³[寺]の上師ジャムリンパ(Bla

- 133 『ツォンカバ大伝』p. 33.15-17: khong gis ni khong rang gi zur chen gyi go sa de sngar dbu ma'i zur chos pa zhi gi go sar 'dug pas de nas brgyud par 'dug gsung zhing/... この一文は難解で文意が取り難い。チャハル・ゲシェはこの文章を以下のように解説している。『ツォンカバ伝』(チャハル造) p. 119.1-2: mkhan po de nyid rang yul gyi zur chen gyi bla ma khri pa cig las de dag gi lung thob pa yin la/ zur chen gyi gdan sa de ni sngon dus dbu ma la mkhas pa'i bla ma cig gi go sar 'dug pas lung rgyun yang de nas brgyud pa yin 'dug gsung/「そのケンポ(＝クンガギエルツェン)は、「自分の故郷の筆頭助教授の上師であつた或る座主からそれら(＝中観六理聚)の聖言を得たが、その筆頭助教授の座は昔は中観に通達した上師の地位としてあつたので、聖言の相承もまたそこから伝承されたものである」と仰っている。」
- 所引の『ツォンカバ大伝』には、zur chenとzur chos paという用語が見出されるが、zur chos paとは、bla chos paと対比的に用いられる僧院内の専門用語であり、後者が主任教授を意味するのに対して、後者は主任教授の「傍らで法を説く者(zur du chos 'chad mkhan)」、即ち、教授補佐ないし助教授の意味で用いられている。例えば、このbla chos paとzur chos paは『青冊』(p. 622.4f.)に見られるが、レーリヒはこれを順にthe chief preacherとthe assistant preacherと訳している(Roerich 1949, p. 524)。問題は、zur chenの意味であり、語形的には、zur chos pa chen poの省略形であることは疑いないが、この語は『藏漢大辞典』にも記載されておらず、厳密な意味は不明である。ただ文脈から判断するに、bla chos paとはほぼ同様の意味に用いられているように見える。この当時クンガギエルツェンは既にナルタン寺座主に就任していたので、zur chenは、ナルタン寺座主の称号であるmkhan chenとも同様の意味であつたと推定される。当時のナルタン寺の教育体制が不明であるので、確言できないが、恐らくは、中観や般若等の各学課ごとにzur chos paと称せられる担当教員がおり、その上に彼らを統括するzur chenないしbla chos paと称せられる主任教授がいて講義を行っていたものと推察される。この場合、後者は実質的に座主に相当する職位である。このクンガギエルツェンは座主に就任する前は中観のzur chos paであつたのであろう。その中観のzur chos paに代々中観六理聚の聖言が伝承されてきたことをこの文章は示しているものと解釈しておく。それ以外に、先に紹介したチャハル・ゲシェの解釈のように、クンガギエルツェンの故郷に中観の聖言が伝承されていた訳ではない。もしこの解釈が妥当であれば、クンガギエルツェンに伝承されてきた中観六理聚の相承がナルタン寺に代々存続していたことになる。

ma 'Jam rin pa, i.e., 'Jam dpal rin chen) からも聖言を聴聞し、彼 (= ジャムリンパ) は法主ラマ (Chos rje Bla ma)¹³⁴ から聴聞した。

〔他方、〕上師ジェツウン (Bla ma rJe btsun, i.e., Red mda' ba) は中観六理聚の聖言をタンモチエ寺の座主で〔中観の〕法を知る上師 (Brang mo che'i gdan sa pa Bla ma chos bshes (sic) pa, sic) から授かった。彼 (= その上師) はナルタン寺のシェルセン (sNar thang pa Sher seng, i.e., Shes rab seng ge) から聖言を聴聞したと仰っている。要するに、その当時、かの師弟 (= レンダワ・ツォンカバ師弟) にとっては、六理聚の解説 (bshad pa) は言うまでもなく、〔その〕聖言を授かる場すらも〔得〕難かったのである。』(『ツォンカバ大伝』 pp. 33.14-34.3)¹³⁵

ここには十四世紀のチベットでは中観の学統が非常に衰微していたことが如実に示唆されている。中観六理聚の相承はナルタン寺の中観の助教授職 (dbu ma'i zur chos pa) に代々伝承されてきたものが細々とした形ではあるが存続しており、ツォンカバはそれを当時のナルタン寺座主クンガギェルツェンから授かった。

他方、レンダワの相承については、後述するように、レンダワ自身、『中観見教導中篇』という著作において自らの中観の見解の相承を明示しているが、ここでは、中観の師としてドクルー・ケンチェン・クンガベルワ (mDog lod mkhan chen Kun dga' dpal ba) の名を挙げているので、名称不明のタンモチエ寺座主はこのドクルー・ケンチェンに比定される。さらには、このタンモチエ寺座主の直前に位置付けられているナルタン寺のシェルセン (= シェーラブセンゲ) は、レンダワ自身の系譜 (後出) では、ケンチェン・チャンチュブセンゲに相当するので、sher seng (i.e., shes rab seng ge) という綴りは、byang seng (i.e., byang chub seng ge) の誤記と考えられる。

134 この Chos rje Bla ma という語は、『ツォンカバ大伝』では、他にもう一箇所 (同 p. 26.10) に見出されるが、そこでは、Chos rje Bla ma'i sku 'dra (法主ラマの肖像) という形で用いられている。これは人名であることは疑いないが、文脈と用例から判断して、Chos rje Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan を指すものと推定される。この点は検討課題である。

135 この箇所は、石濱/福田 2008, p. 55にも訳出されているが、ここでは拙訳を挙げておいた。

ところで先に紹介した『ケードゥプ聴聞録』所収のパツァブ翻訳師からレンダワへ至る中観六理聚の相承系譜は、『シュチェン聴聞録』所収の『根本中論』の系譜①や『四百論』の系譜と途中まではほぼ一致する。即ち、サンプ寺からナルタン寺に入り、チム・ナムカタクやキョトウン・モンラムツルティムの箇所まではほぼ一致し、その後で分岐すると見なされた。但し、それはあくまでケードゥプジュの解釈であって、レンダワ自身はそれとは全く異なる相承系譜を挙げているのである。その点を次に紹介しよう。

レンダワは広中略の三篇の中観の見教導 (dbu ma'i lta khrid) の著作を残しているが、そのうちの中篇の末尾には、中観の見教導の相承 (lta khrid brgyud pa) が記載されている。それはレンダワ自身が自らの中観の学統を示した極めて重要な情報であるので、以下にその全体を引いておく。

bCom ldan 'das thub pa chen po → Byang chub sems dpa' Blo gros rin chen → 'Phags pa Klu sgrub (Nāgārjuna) → rGyal sras Āryadeva →
dPal ldan Zla ba grags pa (Candrakīrti) → Rig pa'i khu byug che chung¹³⁶
→ Ku su lu che ba → Ku su lu chung ba → Bal po Thang bi ha ra →
[チベット (カダム派) へ] **Byang chub sems dpa' Zla ba rgyal mtshan**
(12 c.) → dGe bshes rDzing lung pa 'Od zer grags → sPyil bu ba Grags¹³⁷
pa 'od zer → mKhan chen sPyi'u lhas pa chen po Byang chub 'od →
dPal ldan Gro mo che (1153-1232, N4) → rTsi 'dul ba 'dzin pa Thugs¹³⁸
rje byang chub → bDe ba can pa Shākya byang chub → **mKhan chen**¹³⁹

136 テキストでは、直後の Ku su lu は、che ba と chung ba が別々に提示されているのに対して、この Rig pa'i khu byug は、che chung と総称されているので、ここではテキスト通りに一纏めに挙げておいたが、実際には、Rig pa'i khu byug che ba → Rig pa'i khu byug chung ba と二つに分けられると考えられる。

137 テキストには、sByil bu ba Gras pa 'od zer と表記されている。

138 カダム派の学僧。略伝は『カダム明灯史』pp. 653f. に記載。同書に師として挙げられている人物は、Zhang ston dgra 'jigs pa という人物である (同 p. 651)。それ以外に dPal ldan Gro mo che との師弟関係はまだ確認できておらず、検討課題である。

139 『カダム明灯史』では、直前に言及された rTsi 'dul ba 'dzin pa Thugs rje byang chub の弟子としてその略伝が見出される。そこでは Chos rgyal lDog lod pa と記されているが、名前は Shākya byang chub であるので、同一人物である (同 p. 654)。ド

Kun dga' rgyal mtshan (1326?-1401, N13) → mKhan chen Byang chub
 seng ge → mDog lod mkhan chen Kun dga' dpal ba → Shākya'i dge
 slong gZhon nu blo gros (1349-1412) (『中観見教導中篇』 pp. 340.19-341.7)
 [注。太字は強調部分。]

この相承系譜は、先に紹介した『シュチェン聴聞録』に記載されている如何なる系譜とも共通しない異色のものである。特徴としては、まず第一に、これがチャンドラキールティの帰謬派系統の相承を示すものであるにも関わらず、チャンドラキールティの中観説をチベットに翻訳・紹介したパツァブ翻訳師の名前が見出されないことを挙げる必要がある。『シュチェン聴聞録』所収の中観三論書の相承系譜は何れもパツァブ翻訳師に由来するものであったので、この点で極めて異色である。パツァブ翻訳師以外にチャンドラキールティの中観説を伝える経路があったということは『シュチェン聴聞録』には明記されていなかった、これが史実であれば興味深い情報である。この相承系譜には明記されていないが、アティシャに由来する相承と推定される。

第二に、この相承はカダム派に伝承されたものであることを指摘する必要がある。これはネパール人 (Bal po) のタンビハラ (Thang bi ha ra)¹⁴⁰ という人物から十二世紀のカダム派の学僧ダワギエルツェンに伝承された。ダワギエルツェンはサキャ五祖の第三祖ジェツウン・タクパギエルツェンが八歳の年 (1154) に優婆塞戒を受けた人物であり、サキャ派とも縁が深い。その三代後のチウレ
 ーパ・チャンチュプウーはカダム派の大学匠ゴンパワ (dGon pa ba dBang phyug

クルー寺 (lDog lhud kyi dgon pa) の建立者であるので (同 p. 655.9f.)、ドクルーバと云われる。略伝を見る限り、ニェタンのデワチェン寺 (sNye thang bDe ba can) 出身ではないが、パンユルのデワチェン (sPang yul bDe ba can) に隠棲庵 (dben khang) を結び行に住したとあるので (同 p. 656.4f.)、「デワチェンパ」とも云う。

140 『カダム明灯史』によれば、アティシャは、ネパール (Bal yul) に Thang bi ha ra'i gtsug lag khang という寺院を建立したとある (同 p. 336.14f.)。bi ha ra は、vihāra (精舎、寺) の音写と考えられるので、人名ではなく、Thang 寺出身のネパール人 (Bal po) の意味であろうか。Thang は未詳。漢語か。ここでは便宜上綴り通りに片仮名表記しておくが、検討課題である。この考証が妥当であれば、この人物の相承はアティシャ由来と考えられる。

141 『タクパギエルツェン伝』 p. 36.6参照。

rgyal mtshan, 1016-1082) の四大弟子の一人であるネウスルパ (sNe'u zur pa Ye shes 'bar, 1042-1118) の系統のカダム派の学僧であり、サパンにカダムの法を伝授したことで知られている。¹⁴² さらにサパンがシャーキャシュリーバドラを戒師として具足戒を受戒した際には軌範師を務めた。¹⁴³ その後のナルタン寺第四代座主ペルデン・トモチェ以下三名はカダム派であることが確認されている。

その後のケンチェン・チャンチュプセンゲ (mKhan chen Byang chub seng ge) という人物であるが、この人物は、レンダワの直弟子であるサンギェツェモ (mNga' ris pa Sangs rgyas rtse mo) が著した『レンダワ伝』においてレンダワに中観六理聚等の聖言を授けた「法主チャンセンワ (Chos rje Byang seng ba)」に他ならない。¹⁴⁴ 上記系譜では、レンダワはこの人物からではなく、その次のドクルー・ケンチェン・クンガペルワ (mDog lod mkhan chen Kun dga' dpal ba) から相承を受けたとされるが、『レンダワ伝』によれば、この人物はレンダワの具足戒の戒師であり、レンダワに律典を講義した際に、併せて「見教導 (Ita khrid)」をも伝授したとされる。即ち、

「それから、その偉大なる御方 (=レンダワ) は教法の所作が完成したものである比丘戒を受けて律の学処を顛倒なく実践する伝統を打ち立てる必要があるとお考えになって、上座大阿羅漢ドクルーパ・ケンチェン・クンガペルサンポ (gNas brtan dgra bcom pa chen po mDog lhod pa mkhan chen Kun dga' dpal bzang po) の下に参上して、戒師と軌範師及び僧衆の御前で具足戒を受けた。それから『根本律経』を一度聴聞したところ、ケンチェンにも発心 (thugs bskyed) が起こり、[レンダワはケンチェンから] 見教導 (Ita khrid) をも授かった。」(『レンダワ伝』 p. 44.2-8)

ここで「見教導」とは中観の見教導を含意しているので、レンダワがドクルーパ・ケンチェンから中観の見教導の相承を受けたことが『レンダワ伝』の記述からも確認されたことになる。

さらにその直後にはレンダワの中観の修学事情と当時のチベットにおける中観の学統について興味深い記述が見出されるので、少し長いが訳出紹介してお

142 『カダム明灯史』 p. 315参照。羽田野 1957, p. 255, n. 2に解説が見られる。チウレーパの下でのサパンの修学事情については、西沢 2011, p. 345を参照。

143 『サパン伝』(ヤルルン造) p. 66.3; 『ゴル仏教史補遺』 p. 314.9f. 参照。

144 『レンダワ伝』 p. 15.10参照。同様の記述は『カダム明灯史』 p. 613.13にも見られる。

こう。

「それから、この偉大なる御方（＝レンダワ）は〔仏説の〕真髓の意味を主に説示する聖者龍樹により著作された中観〔六〕理聚をご覧になりたくお考えになられたが、その当時、雪山の山間（gangs ri'i khrod, i.e., チベット）では、中観の仏言（dbu ma'i bka'¹⁴⁵）は断絶していないだけで、〔その意味を〕講義（'chad nyan, lit. 解説と聴聞）により決択することや修行（sgom sgrub, lit. 修習と行）により実践する伝統は衰微しており、非常に失望なさったけれども、〔中観の〕解説は吉祥なるラマタムパ〔・ソナムギェルツェン〕にお願いしようとお考えになったが、〔ラマタムパは〕ウー（dBus）にお住まいであったので、〔ラマタムパに師事する機会は〕得られず、法主チャンセンワ（Chos rje Byang seng ba, i.e., Byang chub seng ge）から、〔中観六〕理聚、『四百論』、『入中論』等の中観関係の諸〔典籍〕を聴聞して、〔三〕宝に祈願し、勝れた御心により繰り返し考察したので、過去の誓願と修学の力と〔三〕宝の加持に依拠して、龍樹師弟と吉祥なるチャンドラキールティの密意を顛倒無く理解なさり、大学者パーヴィヴェーカと〔中観〕自立東方三論（rang rgyud shar gsum）の学説もまた〔チャンドラキールティの帰謬派説と〕混同せずに理解になさって、講義により正しく決択した。

その当時、弟子達は、『根本中論』、『入中論』、『四百論』の三つ（rTsa 'jug bZhi gsum）等の重要な〔中観論書〕に対して教科書（yig cha）を著作なさってくださいと繰り返し¹⁴⁶祈願したので、その祈願の下、『根本中論』、『入中論』、『四百論』の三つと『明句論』の提要の註釈（Tshig gsal gyi stong thun gyi 'grel pa¹⁴⁸）を著作なさり、全ての〔レンダワ〕師弟が講義を

145 底本とした活字版全集本では、kaであるが、Roloff 校訂本（Roloff 2009）の bka' の読みを取る。音読聖言（bka' lung）のこと。直後に明記されているように、テキストを音読する bka' lung は断絶していなかったが、その内容を解説する bshad lung（解説聖言）は衰微していた。

146 活字版全集本では yig 'jog re mdzad zhu zhes ...であるが、Roloff 校訂本では yig cha 'jog par mdzad zhu zhes ...という読みを示す。

147 活字版全集本では、yang だが、Roloff 校訂本の yang yang の読みを取る。

148 この『明句論』の提要（Tshig gsal gyi stong thun）は、『明句論』の註釈ではな

なされたことにより、中観の講義の伝統を正しく打ち立てた力に依拠して、その当時、法主タクパギエルツェン伯父甥 (Chos rje Grags pa rgyal mtshan zhang dbon)、翻訳師キャプチョクペル [サン] 伯父甥 (Lo tstsha ba sKyab mchog dpal [bzang] khu dbon)¹⁴⁹、大学者ヤクトゥク・サンギェベル師弟 (mKhas pa chen po g-Yag phrug sangs rgyas dpal dpon slob) もまた中観の講義を行ったので、雪山のこの山間 (=チベット) に中観の学統 (dbu ma'i bshad srol) が流布し興隆したが、大部分は自立 [派] の見解 (rang rgyud kyi lta ba) に基づくのであり、帰謬 [派] の見解 (thal 'gyur gyi lta ba) は [それを] 理解することすら起こらなかったのである。即ち、[レンダワは]「これだけ (=自立派の見解が広まっただけ) でも [私は] 嬉しい¹⁵⁰。私が最初に修学した時¹⁵¹、サキヤ等では『中観のテキスト (dpe cha) は一つしかない』¹⁵²と云って、[サキヤ派では中観を] 尊重することはなかった (nor mi che ba byed 'dug)¹⁵³。最近、中観のテキストを重視

く、その第一章を示すという解釈が吉水千鶴子により提示されている。Yoshimizu 1996, p. 6f. 参照。但し、レンダワの現行の活字版全集にはこれに相当する作品は収録されておらず、現存不明である。

149 ここに言及された法主タクパギエルツェンと翻訳師キャプチョクペル及びレンダワは、『ツォンカパ大伝』によれば、ツォンカパが三十四歳の年 (1390) にタクツァンゾンカ (sTag tshang rdzong kha) において開催された大説法会において一堂に会している。その際、タクパギエルツェンは般若を、キャプチョクペルサンは『[ハーヴァジュラ・タントラ] 第二品』 (*brTag gnyis*) を、レンダワは『量評釈莊嚴』に対する自身の註釈を説いた。『ツォンカパ大伝』p. 45.17ff. (石濱/福田 2008, p. 67f.) 参照。彼らは、ロントウンの師でもある。『ロントウン伝』p. 310.2参照。

150 Roloff はこれを地の文と解釈しているが (Roloff 2009, p. 211)、従わない。

151 活字版全集本では、du であるが、Roloff 校訂本の dus の読みを取る。

152 テキストは、dbu ma'i dpe cha gcig 'dug で、直訳すれば、「中観のテキストが一つある」という意味であるが、文脈から、dbu ma'i dpe cha gcig [ma gtogs mi] 'dug (中観のテキストは一つしかない) の意味で解釈しておく。ここで「一つ」が何を意味するのか判然としないが、例えば、『根本中論』のみが中観のテキストとして知られており、後代の自立派や帰謬派の典籍は知られていなかったという意味であろうか。検討を要する箇所である。

153 Roloff 校訂本では、nor mi cher byed pa 'dug という読みを示し、“there were many who made the mistake of …” (…誤りを犯した多くの人がいた) と訳しているが (同

すること (rtsis su byed pa) もまた、私の弘法活動 [の結果] なのである¹⁵⁴」とお説きになった。

カルマパ・クン [チョク] ション [ヌ] (Karma pa dKon gzhon, i.e., dKon mchog gzhon nu) の御言葉に、「最近、雪山の山間 (=チベット) において、賢者も愚者も全て口を開けば「中観、中観」と言うが、これはレンダワの御陰である。それ以前には、タンサク [寺] において中観の死体が一つあった [だけ] である (Thang sag na dbu ma shi ro gcig 'dug) と云い、他に [中観の相承が] あったという話は聞かないのである¹⁵⁶」と仰っている。」(『レンダワ伝』 pp. 15.5-16.12; Roloff 2009, pp. 94-96)¹⁵⁷

これによれば、レンダワは最初ラマタムパから中観を聴聞しようと考えたが、ラマタムパはウーにおられたので聴聞する機会を得ず、代わりに法主チャンセンワ、即ち、チャンチュブセンゲに師事して中観六理聚、『四百論』、『入中論』等を聴聞したとされる。ここから当時レンダワとチャンチュブセンゲはウーではなくツァンに住していたことが読み取れるのであるが、この人物は、先に挙げたレンダワの見教導の相承系譜においてドクルーパの直前に見出されるケンチェン・チャンチュブセンゲに他ならない。このケンチェンないし法主チャンチュブセンゲの身元は委細不明であるが、レンダワの見教導の相承系譜によれ

pp. 95, 211)、チベット語としてそのようには読めない。この箇所は難解だが、活字版全集本では、nor mi che ba byed pa 'dugとあり、その場合、norは財宝などの貴重品を意味し、それに、mi che ba (大きくないもの) という形容詞が後置された形と考えられる。それに於格助辞を補足して、nor mi che ba[r] byed 'dug (lit. 大きくない財宝となす)」と読んでおく。nor che bar byed paは、直後の rtsis su byed paと同様に、「重視する」という意味である。ちなみに、この周辺の文章は、『マントウ仏教史年表』所収のレンダワ略伝にも引かれているが、そこでは、まさに nor mi che bar byed paの読みを示している (同 p. 349.1)。

154 以上のレンダワの言葉は後代のサキヤ派の文献に往々に引用される。例えば、『マントウ仏教史年表』 pp. 348.20-349.2; 『ゴル仏教史補遺』 p. 343.17-19参照。

155 テキストは、... mkhas pa dang/ blun po kun kha dbu ma sna dbu ma zer ba 'di ...である。『マントウ仏教史年表』には以下のように換言されている。同 p. 349.3: ... deng sang mkhas rmongs kun la dbu ma dbu ma zer ba 'di ...

156 このカルマパの言葉は以下の史書にも引かれる。『マントウ仏教史年表』 p. 349.2-4; 『ゴル仏教史補遺』 pp. 343.20-344.1参照。

157 Roloff 2009, p. 211に英訳があり、参照した。

ば、ドクルーパ・ケンチェン・クンガベルワと師弟関係にあったことになる。その師として系譜に挙げられているのは、第十三代ナルタン寺座主クンガギェルツェンである。この人物は前述したように、ツォンカバに中観六理聚の聖言を伝授した者であるので、レンダワとツォンカバの中観の相承は結局のところ同系統であり、ナルタン寺に伝承されてきたものであった。

以上、『レンダワ伝』の記述から、レンダワは、(1) ドクルーパ・ケンチェン・クンガベルワから中観の見教導の相承を、(2) ケンチェン・チャンチュブセングから中観六理聚等の相承を受けたことが確認されたことになる。前者は恐らくはアティシヤに由来するカダム派系統の相承であるのに対して、後者はパツァップ翻訳師に由来するサンプ系の相承と考えられる。

一点注意すべきは、レンダワがこれらの師から伝授されたのはあくまで音読聖言であり、その内容的な解説を含むものではなかったことである。そのことは、『レンダワ伝』の後続の文章において、レンダワ自身の言葉として引かれたものに明記されている。

「『プレ (Bu le)¹⁵⁸ において・ラマ・ギェルサンパ (Bla ma rGyal bzang pa)¹⁵⁹ は、ケンチェン・ヤクパ (mKhan chen g-Yag pa, i.e., g-Yag phrug sangs rgyas dpal) のお言葉として、『大尊師シヨンロワ (Slob dpon chen po gZhon blo ba, i.e., gZhon nu blo gros) の中観にも相承の上師 (brgyud pa'i bla ma) はおらず、私にも [中観を伝承した] 尊師はいない。[もしいるというのであれば、その] 相承を示せ』¹⁶⁰ [とヤクパは云った] と仰りました。そして或る者は『[レンダワは] チャンドラキールティの化身である』と云い、或る者は、『[レンダワは] チャンドラキールティから直接に法を聴聞した』と云いますが、何れ [が正しいの] でしょうか」と [師レンダワに] 伺ったところ、[師は] 「[私には、] 中観の語句の相承はあるが、[中観の]

158 Roloff 2009, p. 412, n. 720によれば、Bu reはレンダワが五年間の隠棲行を行なった場所である。

159 活字版全集本では、Bu ler bu laとあるが、Roloff 本では、Bu ler bla maとあるのに従う。

160 活字版全集本では、rgyud stonとあるが、Roloff 本では、rung stonとある。この箇所は難解な箇所だが、今は前者の読みを取り、暫定的に上記の如く補足して訳しておく。

内容の相承があるとはい言い難い (dbu ma'i tshig gi brgyud pa ni yod/ don gyi brgyud pa yod pa dka' mor 'dug)。[自分は、] 吉祥なるチャンドラキールティの化身でないことは確かである。¹⁶¹ [中観の] 法を [チャンドラキールティから] 聴聞したか否かということについては、師弟が分かり合い、¹⁶² [師に対する] 不変の信仰 (mi phyed pa'i dad pa) を得ているならば、[そのような質問をしても] 良いが、¹⁶³ [そのような不変の信仰が] ないのであれば、[師に対して] 誤解が生ずる原因となる」と仰った。』(『レンダワ伝』 pp. 44.16-45.3 ; Roloff 2009, p. 143f.)

これは、『レンダワ伝』の著者であるサンギェツェモが、師レンダワに対して中観の相承について質問した文章である。ここでまず最初に、ラマ・ギェルサンパがヤクトウクの言葉として引いた一文が注目に値するが、それによれば、レンダワにもヤクトウクにも中観を伝授した師は存在しないと云い、実際、レンダワは、自分には中観の「語句の相承 (tshig gi brgyud pa)」はあるが、「内容の相承 (don gyi brgyud pa)」は存在しないと回答している。ここで、「語句の相承」と「内容の相承」とは、順に、所謂、「音読聖言 (bklags lung)」と「解説聖言 (bshad lung)」に当たる語であり、前者は、上師がテキストを音読したものを弟子が聞くことで授かる聖言であるのに対して、後者は、単に音読のみならずテキストの内容的解説を加えたものを意味する。このレンダワの言葉に帰される一文が妥当であれば、レンダワには中観論書の音読聖言はあったが、その解説聖言はなかったことになる。ここから中観論書の内容解説の伝統は既に当時断絶しており、僅かにテキストを音読する伝統だけが細々とした形で存続していたことが読み取れるのである。先にケードゥブジェは、『ツォンカバ大伝』において、「要するに、その当時、彼の師弟 (=レンダワ・ツォンカバ師弟) には、[中観六] 理聚の解説 (bshad pa, i.e., bshad lung) は云うまでもなく、聖言 (lung, i.e., bklags lung) を伝受する者すら稀少であったのである」(同 p. 34.1-3) と述べていたが、それが史実を反映したものであることがこの『レンダワ伝』の記述

161 活字版全集本では、len par thag chod であるが、Roloff 校訂本の min par thag chod の読みを取る。

162 活字版全集本では、nang chan とあるが、Roloff 校訂本の nang byan の読みを取る。

163 Roloff 校訂本では、thob par grags とあるが、活字版全集本の thob pa yod na drag の読みを取る。

からも確認されたことになる。

以上、サンギェツェモの『レンダワ伝』やケードゥプジェの『ツォンカパ大伝』等を資料としてレンダワの中観の相承について検討した。その両伝の記述から共通して読み取れることは、その当時、レンダワ（1349-1412）の修学時代に当たる十四世紀後半頃には、チベットにおいては中観の学統が非常に衰微しており、中観典籍の解説聖言はおろか、その音読聖言さえ得難い状況であったことである。それをほぼ独力で再興したのがレンダワであり、その弟子のツォカパであった。そしてそのレンダワ師弟の中観復興運動により、『レンダワ伝』の記述によれば、当時有数の学者であった法主タクパギェルツェン伯父甥、翻訳師キャプチョクペルサン伯父甥、そして、サキヤ派教学の主流を形成する大学者ヤクトック・サンギェペル（1350-1414）師弟等の当時のチベット人学者達の間に中観研究が再び流通し興隆することになった。十四世紀における中観の学統復興に対するレンダワの貢献については、所引のレンダワ自身の言葉やカルマパ・クンチョクシヨヌの言葉が如実に物語るところである。そこに言及されたタンサク寺は、先に解説したように、ナルタン寺と共にチベットにおける中観研究の一大拠点となったパツァブ翻訳師由来の帰謬派説の学統を保持する古刹である。そのタンサク寺においてすら、当期中観の学統は「死に体（shiro）」であったというのであるから、他は推して量るべきである。ナルタン寺においても中観の助教授職に中観六理聚の音読聖言の相承が細々とした形で存続しているだけで、もはやそのテキストの内容を解説できる者は見出せない状態であったのである。実際、現存する資料に依る限り、レンダワはサキヤ派教学史のみならず、恐らくはチベット仏教教学史において初めて中観三論書（『根本中論』、¹⁶⁴『四百論』、¹⁶⁴『入中論』）全てに対して註釈を著した人物であり、以降、チベ

164 レンダワ以前には、シャーキャチョクデンの『中観思想史』によれば、シャン・タンサクバも中観三論書全てに対して註釈を著したとされる（同 p. 234.2）。『アク稀観書目録』には、『四百論』、¹⁶⁴『入中論』、¹⁶⁴『宝行王正論』、¹⁶⁴『六十頌如理論』の四書に対するシャン・タンサクバの註釈が記載されており（MHTL nos. 11343-46）、それ以外にも、『明句論』の註釈が現存しているので、これが史実を反映しているのであれば、中観三論書全てに対して註釈を著した最初の人物は、シャン・タンサクバと云うことになる。しかし、『明句論』の註釈以外は何れも現存しておらず、伝承の域を出ない。他方、ナルタン寺の大学匠リクレル（1227-1305）は『根本中論』と『四百論』の註釈を著し、かつ、その両者の現存が確認されている。『カダム全集』61参照。但し、『入中論』の

ットにおいては諸々の学説のうち中観が至上の見解を説くものとして位置付けられ、非常に多くの註釈書や概説書が著されるようになった。その契機を作ったのはレンダワに他ならない。そして、特にその直弟子にしてゲルク派の創始者であるツォンカパにより中観説を至上と位置付ける仏教教学の再構築が行なわれたのである。それは、或る意味、チベット仏教教学史における「パラダイムシフト」とも称されるべき根本的な転換であった。

先に紹介した中観三論書の相承系譜において、ヤクトック・ロントゥン師弟以前のサキャ派の学者が一人も見出されなかったのは、そのような事情を背景としていたことがここで確認されたことになる。つまり14-15世紀に至るまでサキャ派においては中観論書を本格的に修学する伝統がなかった、あるいは、仮にあったとしても久しく断絶していたことが結論付けられる。実際、レンダワ以前においてはサキャ派の中観論書の現存は伝えられていない。ソナムツェモやサパンの伝記資料から初期サキャ派へ中観が伝承されたことを確認したが、しかし、それは結局のところ、サキャ派教学史において中観研究という一つの大きな学統を形成するに至らなかったという結論を導出することができる。

このようにチベットにおける中観の学統においてレンダワの占める位置付けは極めて甚大なものがあつたが、解せないのは、先に紹介した『シュチェン聴聞録』所収の中観三論書の相承系譜にはレンダワの名前が全く登場しないことである。つまりその存在が完全に黙殺されているのであるが、我々はこのことを如何に解釈すべきであろうか。

その件についてはまだ憶測の域を出ないが、先にも指摘したように、ヤクトック・ロントゥン師弟の学統を主流と位置付けるサキャ派においてはレンダワの学統は傍流という位置付けの域を出なかったことが背景にあつたかと推察される。実際、レンダワとヤクトックは一歳違いの同時代人であるが、種々の見解の相異があり両者の間に論争があつたことは、『レンダワ伝』にも言及され

註釈は含まれていない。リクレルの著作については、西沢2011, pp. 268-274にリクレル自身が作成した自著目録を下に一覧にしてあるので、参照されたい。そこにも、『入中論』の註釈は記載されていないので、リクレルは『入中論』には註釈を著さなかったと考えられる。ちなみに、同じ巻にはリクレルの『中観莊嚴論』の註釈が収録されているので、十四世紀のナルタン寺には、帰謬派系統の学統のみならず自立派系統の学統も存続していたことが窺われる。

ているところである。¹⁶⁵さらに単に傍流であったのみならず、異端視さえされていたことが、後代のシャーキャチョクデンの記述から垣間見ることができる。

「また大善知識レンダワはサキヤ派の大善知識 [であるが]、特にクンケン・トルボパの法統を継ぐ者達 (Kun mkhyen Dol po pa'i chos brgyud pa dag) の下で出家し修学をなさったようである。後に教義の立て方は、

(1) 『時輪』 (*Kālacakra*) の内外の偈註を合集した論書 (*Dus kyi 'khor lo'i rtsa 'grel phyi nang 'dres pa'i bstan bcos*) と、第三法論の經典と弥勒の全ての法は [その] 見解は唯識説から出ず、(2) 三タントラ (*rgyud gsum*) 及びその口訣の見解もまた唯識説から出ないばかりでなく、(3) 『秘密集会』 (*Guhyasamāja*) の光明の次第 (*gSang ba 'dus pa'i 'od zer gyi rim pa*) もまたチベット前代の者達は唯識説として註釈していると云うことと、(4) 中観自立派の見解は初地より捨てる必要があることと、(5) 帰謬 [派] の見解は仏地において捨てる必要があることと、(6) ジェツウン・ツェモ (*rJe btsun rtse mo, i.e., bSod nams rtse mo*) と法主 (*Chos rje, i.e., Sa pan*) の顕教乗 (*mtshan nyid theg pa*) の解説の幾つかを汚しているように見える (*mthing slad byed par snang ngo*)¹⁶⁶。」(『法輪設定』 p. 472.3-7)

ここでシャーキャチョクデンは、レンダワを「クンケン・トルボパの法統」、即ち、チョナン派 (*Jo nang pa*) の学統を継ぐ者達の下で出家・修学したと表現することで、所属はサキヤ派であるが、その教学はチョナン派の学統に連なる者であることを暗に示している。さらには、レンダワの解釈がソナムツェモやサパンの顕教の著作に見られる見解と相反しそれを汚しているとまで云って手厳しく批判している。このように、レンダワの教学がサキヤ派の正統な教学の伝統からは異端視されていたことが、このシャーキャチョクデンの記述の一端からも十分に窺うことが出来るのである。

実際、レンダワは、十八歳の年 (1366) に、ササン・マティパンチェン (*Sa*

165 例えば、『レンダワ伝』 pp. 26, 59 など参照。ヤクトックとレンダワの関係については、西沢 2011, p. 369f. を参照されたい。

166 *mthing* とは「藍色」の意味。直訳すれば *mthing slad byed pa* は「藍色に汚す」「青黒く汚す」という意味であるが、要するに、ソナムツェモやサパンにより説かれたサキヤ派の正統な教え (白法) を汚している、あるいは、それから逸脱しているという意味である。

bzang Ma ti paṇ chen) の下で出家、優婆塞戒と沙弥戒を授かり、その後、ニャウン・クンガペル (Nya dbon Kun dga' dpal) 等に師事して『量評釈』等を研究したことが知られているが、¹⁶⁷ ササン・マティパンチェンやニャウン・クンガペルはチョナン派のトルポパの弟子筋に当たる人物であるので、シャーキャチョクデンの指摘はあながち誤りであるわけではない。実際、『ゴル仏教史補遺』は、サキャ派において次のような口伝が伝わっていることを報じている。

「ブ [トウン] (Bu [ston]) とトル [ポパ] (Dol [po pa]) の弟子は、ニャ [ウン] (Nya [dbon]) とツウン [ドゥペル] (brTson ['grus dpal]) の二人である。ニャ [ウン] とツウン [ドゥペル] の二人の弟子は、ヤク [トゥク] (g-Yag [phrug]) と [レンダワ・] ション [ヌロトゥ] (gZhon [nu blo gros]) の二人である。」(『ゴル仏教史補遺』 p. 348.7f.)¹⁶⁸

この一連の学者達の師弟関係はテキストの順序通りでないことに注意する必要がある。例えば、この文章の直前にはヤクトゥクがツウンドゥペルに師事したことが明記されているので、ツウンドゥペルの弟子はレンダワはなく、ヤクトゥクに結び付ける必要がある。さらに、『量評釈』の相承系譜から、ツウンドゥペル→ヤクトゥクとニャウン→レンダワの師弟関係が確認されており、¹⁶⁹ 前述したように、『根本中論』の系譜①には、プトウン師弟→ヤクトゥクの相承が明記されていた。それ故、所引の口伝から以下のような二つの学統を抽出することが出来る。

1. プトウン → ツウンドゥペル → ヤクトゥク
2. トルポパ → ニャウン → レンダワ

このうちサキャ派の主流となったのは前者であり、後者はチョナン派に由来しゲルク派に伝承されていく相承であるので、サキャ派にとっては完全に傍流の位置付けにあったのである。

他にもレンダワは、『時輪』(*Kālacakra*)¹⁷⁰ には内的矛盾があり、仏説ではない

167 『レンダワ伝』 p. 10 参照。レンダワの修学事情については、西沢 2011, pp. 382-388 参照。

168 Bu Dol gyi slob ma Nya brTson gnyis/ Nya brTson gnyis kyi slob ma g-Yag gZhon gnyis/

169 西沢 2013, p. 104 参照。

170 『レンダワ伝』 p. 21.17f.: bdag nyid chen pos (i.e., rJe btsun red mda' bas) Dus

と認める論師としてチベットでは知られており¹⁷¹、顕密の種々の教義に独自の解釈を与えた。ケンチェン・ガワンチュータク (mKhan chen Ngag dbang chos grags, 1572-1641) もまた、レンダワの論理学思想はサキヤ派の正統な解釈とは異なる点を幾つか指摘している¹⁷²。

「ヤクパ (g-Yag pa, i.e., g-Yag phrug Sangs rgyas dpal) と同時代人であるジェ・レンダワ・チェンポ (rJe Re mda' ba chen po) は、『量評釈註・正理の如意樹』 (rNam 'grel gyi ṭikka Rig[s] pa'i 'dod 'jo) と云うものを一帙著作した。… [中略] …『量評釈』の帰敬偈を解説なさるとき、「深甚にして (zab cing)」という [語] を如実知 (ji lta ba mkhyen pa) に、「広大な身体を有する (rgya che'i sku mnga')」という [語] を如量知 (ji snyed pa mkhyen pa) に結び付けるので、[それらを] 三身に結び付ける解説はなさらない。「宗法とその部分 (= 所証法) によって遍充されたものは (phyogs chos de chas khyab pa ni)」¹⁷³ (PV I. 1a) と分離辞 (dgar tshig)¹⁷⁴ を結び付けて、逐語的に解説しているので、〈[証因の] 三相 (tshul gsum)〉を正しい証因の定義としてお認めになっているようである。[『量評釈』] 第二章において、「認識手段は無欺の知である」(PV II. 1a) は勝義の認識手段、「未知の対象を明らかにするものもまた」(PV II. 5c) は言説の認識手段を示すものと解説すること等¹⁷⁵、サキヤ派の説と一致しないものが幾つか見られるのである (Sa lugs dang mi mthun pa 'ga' snang)。」(『教義弁

khōr (read: 'khōr) la 'gal 'du yod gsungs/

171 『レンダワ伝』p. 23.13: bdag nyid chen pos *Dus 'khōr* chos min gsungs par Gangs can na grags na'ang/... もっともサンギェツェモは、直後で、レンダワの密意を、時輪は語句の通りであれば内的矛盾があると云っているのであり、仏説 (chos) ではないと云っているのではないと会通している。

172 この件は既に西沢 2011, pp. 397-399に論じたので、委細はそれに譲る。

173 テキストでは、chos とあるが、chas の誤記。

174 ni という語 (ni sgra) のこと。『量評釈』の蔵訳原文では、yi という属格辞であるが、それを ni という分離辞に置き換えているという意味。チベットの ni は、日本語の「は」と同様に主題提示の機能があるので、分離辞と云われる。即ち、ni が付された語を、他の語から分離し独立した語単位として提示するからである。

175 これはプラジュニャーカラグプタの解釈である。西沢 2007, p. 339 周辺参照。サバンの認識手段の定義の解釈は、西沢 2007, p. 360ff. 参照。

別』 pp. 42.3-43.2)

このガワンチュータクの記述からも、サキャ派の学統においてレンダワの教学はサキャ派の正統説からは外れたものと見なされていたことが窺われる。それ故、先のシャーキャチョクデンのレンダワに対する辛辣な評価もサキャ派においてはあながち特異なものではなく、後代のサキャ派の学者達の間で一般に広く共有されていた評価であったと評価できよう。

さらに、レンダワの筆頭弟子の一人であるツォンカパが後にゲルク派を創立したことを契機として、サキャ派は教学と政治の両面においてゲルク派とライバル関係に入ったが、そのことがツォンカパに連なる人物の排除という形で働いたこともまたその背景として十分に考えられる。そのような内外の諸要因により後代のサキャ派の聴聞録の中からレンダワの名前が抹消されるに至ったのである。実際、サキャ派において、さらには、チベット仏教史上、中観三論書全てに対して初めて註釈を著しその学統を打ち立てた人物はレンダワに他ならないのに、その相承系譜に彼の名前が一言も言及されないのは極めて異例であり異常ですらある。例えば、先に紹介した『四百論』の相承系譜においてサキャ派のロントゥンに相承を伝えたとされるのはカルマパ・クンチョクションヌであるが、そのカルマパ自身、先に紹介したように、レンダワ以前にはタンサク寺においてすら中観の相承は「死に体」であり、他に中観の相承があったとは聞かないと告白しており、当時中観の学統が復興したのは偏にレンダワの御陰であると明言しているのである。同系譜ではカルマパに相承を伝えたのはナルタン寺第十四代座主ドゥツパシェーラブ (1357-1423) とされるが、そこにはレンダワ (1349-1412) の名前があってもおかしくない。所引のシャーキャチョクデンの言葉にもあるように、サキャ派の相承系譜にレンダワの名前を連ねることはサキャ派の清浄なる学統を「汚すこと」と見なされたのかもしれない。いずれにせよ、サキャ派の中観三論書の相承系譜にレンダワの名前が見出されないのは、史実を反映したものではなく、単なるサキャ派の《宗学上の理由》による可能性が高い。

小結

以上、『シュチェン聴聞録』に見られる相承系譜の情報の妥当性を、一連の伝記資料に基づき検証する作業を行なった。そこで明らかとなったのは、以下の

通りである。

1. 『シュチェン聴聞録』に収録された中観三論書の相承系譜には、ソナムツェモやサパン等の初期サキヤ派学者の名前は見出されなかったが、ソナムツェモやサパンの伝記から、彼らがチャバやツルトウン等のサンブ系学者から中観典籍の相承を受けていたことが確認されたこと。
2. 『入菩薩行論』の系譜①に見られるようなサパン（1182-1251）とチュールン衆初代座主のチャンチュプベル（1183-1264）の師弟関係は疑わしく、チャンチュプベルに続く第二代座主デワベル等の三者は、シャーンティデーヴァに由来する《大波濤行の相承》を受け継ぐ高名な道次第行者であるので、サキヤ派の『入菩薩行論』の相承に対する権威付けのために彼らの名前が意図的に相承系譜に挿入された可能性があること。
3. ラマトムパの伝記には、『入菩薩行論』の系譜①に見られるチュールン衆第四代座主ソナムタクパはラマトムパの具足戒の戒師であり、受戒後に同師から一連の律典を修学したが、『入菩薩行論』を修学した事実は確認されなかった。ラマトムパに『入菩薩行論』を教授したのは、むしろパン翻訳師、プトウン、ギエルセ・トンメサンボらの可能性が高いこと。
4. 『入菩薩行論』の系譜①に見られる相承系譜は、サパンからチュールン衆へ伝承された後は、実質的に、『入菩薩行論』とは何も関係のない《戒統（mkhan brgyud）》の系譜となっていること。
5. 『シュチェン聴聞録』に収録された中観三論書及び『入菩薩行論』の相承系譜にはレンダワの名前は全く見出されなかったが、レンダワの伝記及びその他の関連資料から、実際にはレンダワは十四世紀に衰微の極みにあった中観論書の相承をほぼ独力で再興した人物であり、その相承は実際にはサキヤ派にも伝承されていた可能性が高いこと。
6. それにも関わらず、レンダワの名前が後代のサキヤ派の聴聞録に見出されないのは、レンダワの教学がサキヤ五祖からヤクトック・ロントゥン師弟に伝承されたサキヤ派主流の学統とは別系統の傍流に当たるものであり、その解釈にはサキヤ派正統教学にとって異端的な傾向が見られたため、宗学上の理由により意図的に系譜上から抹消された

可能性があること。

7. サキヤ派においては、中観の相承は12-13世紀頃にソナムツェモやサパン等の初期サキヤ派の学者達に伝えられたが、その後中観研究の大きな学統を形成するには至らず、十四世紀にレンダワやヤクトク・ロントウン師弟が出るまでは、サキヤ派において中観論書を本格的に研究する伝統は存在していなかったこと。

以上の結論は、『聴聞録 (gsan yig)』という文献の資料的価値について我々に反省を促すものである。即ち、聴聞録は、一方においては、確かに各宗派の学統について貴重な情報を与えてくれる重要な文献である。例えば、本稿で扱ったサキヤ派における中観の学統については、十四世紀に至るまでサキヤ派において中観論書の相承は存在していなかったという重要な情報を伝えてくれた。しかるに他方において、聴聞録には、実際の師資相承の系譜を可能な限り忠実に再現することを目的とするのではなく、その宗派の学統の正統性を師資相承の系譜の形で表明し、さらにはそれを顕彰することを目的とする隠れた宗学的意図が潜在していることを看過することは出来ない。それ故、後代の聴聞録に見られる師資相承の情報を鵜呑みにするのではなく、本稿で試みたように、伝記や史書等の各種関連文献と照合しつつ、その妥当性を批判的に検証する作業、端的には、聴聞録の批判的研究が必要となっている。

結語—サキヤ派における中観研究の所依典籍とその歴史的変遷—

以上、『シュチェン聴聞録』に収録された中観三論書及び『入菩薩行論』の相承系譜を資料として、サキヤ派に伝承された中観の学統を抽出・整理し、それを初期サキヤ派学者からはソナムツェモ (1142-1182) とサパン (1182-1251) の二人、中期サキヤ派学者からはラマタムバ (1312-1375) とレンダワ (1349-1412) の二人というサキヤ派教学の形成に直接的に関与した学匠達の伝記や史書その他の関連資料と照合することを通じて、その妥当性を検証する作業を行なった。そこで明らかにされた結論は各章の章末に「小結」の形で纏めてあるので、ここで逐一再説することは控え、最後にサキヤ派における中観研究の所依典籍とその歴史的変遷について閑説することで結語に代えることにしたい。

後代の聴聞録に収録された中観三論書の相承系譜においてサキヤ派の学者が

登場するのは、十四世紀のヤクトック・ロントゥン師弟が最初であり、それ以前の初期サキャ派の学者は系譜には全く見出されなかった。このことは、十四世紀に至るまでサキャ派においては、『根本中論』等の中観論書を本格的に修学する伝統がなかったことを示唆しており、それがほぼ事実であったことは、レンダワが十四世紀に当時衰微の極みにあった中観の学統を復興する以前には、サキャ派において中観論書に対する註釈が殆ど皆無であったことが如実に示している。伝記資料によれば、レンダワに先立ち、ラマタムパが『六十頌如理論』等の中観六理聚の小品に対して註釈を著したと伝えられているが、その現存は確認されておらず、また『根本中論』等の中観三論書に対する註釈は著されなかった。それに対して、サキャ派教学史上、さらには、恐らくはチベット仏教史上、初めて中観三論書全てに対して註釈を著した人物はレンダワであり、彼を端緒として、以後サキャ派において中観三論書を所依典籍とする中観の本格的な研究が開始された。その意味でレンダワをサキャ派教学史における《中観学の祖》と称しても過言ではない。そのことは『レンダワ伝』に引かれたカルマパ・クンチョックシヨヌの言葉からも窺い知ることができるが、恐らくは後代のサキャ派の宗学上の理由により、レンダワの名前はサキャ派の聴聞録からは抹消された。

他方、サキャ派においてそれ以前に中観説が全く修学されることがなかったのかというならば、それもまた事実に反することであり、実際、そのことはソナムツェモの『入菩薩行論』の註釈やタクパギエルツェンの『タントラ現観』、サパンの『牟尼密意解明』等の初期サキャ派の学者達の著作に中観説が解説されていることから確認される。問題は、その際に彼らが一体如何なる中観典籍を所依としていたのかということであるが、ここに我々はサキャ派において中観思想研究の所依典籍には歴史的変遷があったことを見出すことができるのである。

端的には、ソナムツェモ等の十二世紀の初期サキャ派の学者達が中観を研究する際に主に依用したテキストは、龍樹の中観六理聚やアーリヤデーヴァの『四百論』、さらには、「中観自立東方三論」と称される自立派の三大論書やチャンドラキールティの『入中論』等の一連の中観論書ではなく、シャーンティデーヴァの『入菩薩行論』であった。このことは、ソナムツェモやタクパギエルツェン、サパンの直弟子にしてサパン伝を記したロパクンケン等の初期サキ

ャ派学者を初め、さらには、十四世紀に活躍したラマタムパ（1312-1375）やサン・マティパンチュン（1294-1376）、サキヤ派に密接に関係があるプトウン（1290-1364）やギエルセ・トンメサンポ（1295-1369）のような大学者達により『入菩薩行論』¹⁷⁶に対して多数の註釈書が著されたことが如実に示している。即ち、『入菩薩行論』に対しては、サキヤ派教学の初期の段階、年代的には、十二世紀頃から十四世紀頃に掛けて綿々と修学の伝統が積み重ねられてきたのであり、このことは、サキヤ派においてレンダワ以前には中観論書に対する註釈書が皆無に近い状態であったのと著しく対照的である。

『入菩薩行論』は菩薩行論を主題とするテキストであるので、中観思想を正面から取り上げたものではないが、その第九章冒頭部に見られる二諦説の議論が初期サキヤ派の中観思想の議論の基盤とされた。その意味で、サキヤ派中観思想の学統においてこの『入菩薩行論』が果たした役割は極めて大きなものであったと評価する必要がある。レンダワ以前には、中観三論書などを真っ向から取り上げて研究する伝統はなかったが、中観を研究する伝統が皆無であったわけではなく、それは主に『入菩薩行論』を、その中でも特にその第九章を所依典籍として行なわれてきたのである。サキヤ派において『入菩薩行論』が重要視されたのは、サキヤ派が基本的に密教や行の修習を重要とする学派であったことと無縁ではない。サキヤ五祖の著作の大部分は密教関係の作品であり、サキヤ派において顕教が本格的に取り上げられるようになったのは、第四祖のサパンに至ってからである。『入菩薩行論』は決して密教の典籍ではないが、そこに詳説された菩薩行の議論は行重視のサキヤ派の学統に合致するところがあったと推定される。この『入菩薩行論』は、所謂、『カダム六典籍（bKa' gdams gzhung drug）』の一つでもあり、サキヤ派のみならず、カダム派においても熱心に研究された。しかるに、十四世紀に至り、レンダワが中観三論書を所依典籍として中観の学統を新たに打ち立てたことを契機として、以後、サキヤ派に

176 サキヤ派及びサキヤ派に関係するチベット人諸学者達の『入菩薩行論』の註釈書は、近年刊行された『サキヤ法蔵大集』（*Sa skya'i chos mdzod chen mo*, 40 vols., Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2013）というサキヤ派の著作集に六巻（Vol. 20-25, 注. Vol. 20はインド原典のみ）に纏められている。それに対して同著作集には中観典籍が含まれていないのが象徴的である。

において『入菩薩行論』の研究が後退し、代わりに中観三論書の研究が前面に出るようになったのである。¹⁷⁷

このように、十四世紀を境としてサキャ派の中観思想研究において所依典籍の歴史的転換があったことが確認されたわけだが、この転換を仮に《サキャ派中観思想史におけるパラダイム転換》と称しておきたい。所依典籍が『入菩薩行論』から中観三論書へ移行することに応じて、それに基づく中観思想研究の在り方もその根底から一新されたからである。¹⁷⁸そのパラダイム転換を惹起した人物こそが十四世紀のサキャ派の大学匠レンダワであった。そして、この転換は、単にサキャ派に留まることなく、特にレンダワの学統を受け継いだツォンカパが、中観説を、その中でも特にチャンドラキールティの帰謬派説を諸々の学説のうち至上の見解として位置付けたゲルク教学を創立し広く宣説したこと、以後のチベット仏教界の思潮を定めることになった。それは、サキャ派の枠組みを超えた《チベット仏教思想史におけるパラダイム転換》にまで展開したと評しても過言ではない。

ゲルク派では、「五大典籍 (gzhung chen po ti lnga)」と称される五つの学課（論理学・般若学・中観学・戒律学・俱舍学）を主要な修学対象とするが、このうち特に中観説を至上の見解とする解釈は、レンダワ・ツォンカパ師弟による中観復

177 実際、レンダワ、ロントウン、コラムパ、シャーキャチョクデンらには、中観三論書に対する註釈はあるが、『入菩薩行論』の註釈がないことがこのことを如実に物語っている。しかし、このことはサキャ派の学統において『入菩薩行論』が研究されなくなったことを意味するわけではない。実際、サキャ派では十八の論書を所依典籍として顕教教学を修学する伝統があるが、『入菩薩行論』もその一つに含まれている。在印ゾンサル寺の履修課程において、初学年に修学されるのがこの『入菩薩行論』と『大乘莊嚴經論』であり、二年目から中観三論書を初めとする一連の中観論書が修学される。クンガ 2016, p. 519f. 参照。但し、『入菩薩行論』は中観ではなく、菩薩行を修学する典籍として位置付けられており、中観の所依典籍としては中観三論書が主とされるようになったことには疑いはない。

178 レンダワ以降の主要なサキャ派の学匠の著作を見ると、例えば、ロントウン、コラムパ、シャーキャチョクデンらには、『根本中論』と『入中論』の註釈はあるが、『四百論』に対する註釈は見出されないで、中観三論書の中でも、『四百論』の重要性は他の二書に比べて低かった模様である。他方、ゲルク派では特に『入中論』が中観の所依典籍として重視されるようになるが、それについては稿を改めて紹介することにした。

興運動を契機として初めて打ち立てられたのである。それ以前には、中観説は決して主要な修学対象ではなかった。そのことは、『レンダワ伝』に明記されているように、当時、中観帰謬派の学統を伝えるタンサク寺において、中観は「死体 (shi ro)」と表現される程に衰微していたことに如実に示されている。ツォンカパによる中観説を頂点に据えた仏教教学体系の形成とその歴史的展開の委細については、稿を改めて検討することにした。

文献表

インド原典

- 『入菩薩行論』(BCA) : Śāntideva, *Bodhisattvacaryāvatāra*. Tib. D 3871. Cf. L. de La Vallée Poussin (ed.), *Bodhisattvacaryāvatārapañjikā* of Prajñākaramati.
- 『入中論』(MAv) : Candrakīrti, *Madhyamakāvatāra*. Tib. D 3862. Cf. L. de La Vallée Poussin (ed.), *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*. Bibliotheca Buddhica IX.

蔵外文献

- 『アク稀観書目録』(MHTL) : dPe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer yid kyi kunda bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma bzhugs so. In: *Materials for a History of Tibetan Literature*. Part 3. Lokesh Chandra (ed.), New Delhi, 1963, pp. 503-601.
- 『イエシェツエモ伝』 : rJe dGe 'dun rgya mtsho, dPal ldan bla ma dam pa'i rnam par thar pa Nor bu'i do shal zhes bya ba bzhugs so. In: *Pañ chen Ye shes rtse mo'i bKa' gdams chos 'byung dang rnam thar bzhugs so*. Ser gtsug nang bstan dpe rnying 'tshol bsdu phyogs sgrig khang (ed.), np. nd., pp. 52-136.
- 『黄瑠璃史』 : sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho, dGa' ldan chos 'byung vaiḍūrya ser po. rDo rje rgyal po (ed.), Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1989.
- 『カダム全集』(KS) : bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Vol. 1-30, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006; Vol. 31-60, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.
- 『カダム全集第二集目録』 : bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrigs thengs gnyis pa'i dkar chag bzhugs so. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Si

- khron mi rigs dpe skrun khang, 2007. [KS Vol. 31-60の目録]
- 『カダム珍宝史』: bSod nams lha'i dbang po, *bKa' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nyin mor byed pa'i 'od stong*. In: *Two Histories of the bKa'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*. Gangtok, Sikkim, 1977, pp. 207-393.
- 『カダム派史』: Sangs rgyas rtse mo, *bKa' gdams rin po che'i bstan 'dzin rnams kyi byng khungs Paṇ chen Ye shes rtse mos mdzad pa bzhugs so*. In: *Paṇ chen Ye shes rtse mo'i bKa' gdams chos 'byung dang rnam thar bzhugs so*. Ser gtsug nang bstan dpe rnying 'tshol bsdu phyogs sgrig khang (ed.), np. nd., pp. 1-51.
- 『カダム明灯史』: Las chen Kun dga' rgyal mtshan, *bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2000.
- 『教義弁別』: mKhan chen Ngag dbang chos grags, *Bod kyi mkhas pa snga phyi dag gi grub mtha'i shan 'byed mtha' dpyod dang bcas pa'i 'bel ba'i gtam skyes dpyod ldan mkhas pa'i lus rgyan rin chen mdzes pa'i phra tshom bkod pa bzhugs so*. In: *The Collection Works of mKhyen-chen ngag-dwang chos-grags*. Vol. 4 (ngag), Darjeeling: Sakya Choepheling Monastery, 2000, pp. 1-182.
- 『ケー ド ウ プ 聴聞録』: mKhas grub dGe legs dpal bzang, *mKhas grub thams cad mkhyen pa dGe legs dpal bzang po'i gsan yig bzhugs so*. (sKu 'bum ed.)
- 『コラムパ伝』(アメ造): A mes zhabs Ngag dbang Kun dga' bsod nams, *Kun mkhyen chos kyi rgyal po bSod nams seng ge'i rnam par thar pa Ngo mtshar gsal ba'i nyin byed bsod nams rab rgyas*. In: *Sa skya chos mdzod*, Vol. 39, Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2013, pp. 160-260.
- 『コラムパ伝』(ムチェン造): Mus chen Sangs rgyas rin chen, *Chos kyi rgyal po rin po che Kun mkhyen bSod nams seng ga'i rnam par thar pa*. In: *Sa skya chos mdzod*, Vol. 39, Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2013, pp. 1-22.
- 『ゴルチェン伝』: Sangs rgyas phun tshogs, *rDo rje 'chang Kun dga' bzang po'i rnam par thar pa Legs bshad chu bo 'dus pa'i rgya mtsho zhe bya ba bzhugs*. In: *Lam 'bras slob bshad (Sa skya lam 'bras Literature Series*, Dehra Dun: Sa skya Centre, 1983), Vol. ka, pp. 475-580.

『ゴル仏教史補遺』: Sangs rgyas phun tshogs, *rTsom 'phro kha skong*. In: *Sa skya'i chos 'byung gces bsdu*, Sa skya'i dpe rnying bsdu sgrig u lhan (ed.), Vol. 4, Krung go'i bod rig dpe skrun khang, 2009, pp. 254-454. [= Ngor chen dKon mchog lhun grub, *Dam pa'i chos kyi byung tshul bstan pa'i rgya mtshor 'jug pa'i gru chen* に対する補遺]

『サキャ氏族史』(アメ造): A myes zhabs Ngag dbang kun dga' bsod nams, *'Dzam gling byang phyogs kyi thub pa'i rgyal tshab chen po dpal ldan sa skya ba'i gdung rabs rin po che ji ltar byon pa'i tshul gyi rnam par thar pa ngo mtshar rin po che'i bang mdzod dgos 'dod kun 'byung bzhugs so: A History of the 'Khon Lineage of prince-abbots of Sa skya*. Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Centre, 1975.

『サキャ氏族史』(タク造): sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen, *dPal ldan sa skya'i gdung rabs 'dod dgu'i rgya mtsho zhes bya ba gzhugs so*. In: *sTag tshang lo tsā ba shes rab rin chen gyi gsung 'bum*. 2 vols. [Kathmandu:] Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang, 2007, Vol. 1, pp. 1-70.

『サキャ全集』(SK): *Sa skya bka' 'bum: The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism*. bSod nam rgya mtsho (ed.), Tokyo: The Toyo Bunko, 1969. [sDe dge ed.]

『サパン伝』(ロパ造): lHo pa kun mkhyen Rin chen dpal, *dPal ldan Sa skya paṇḍita'i rnam thar Kun mkhyen Rin chen dpal gyis mdzad pa bzhugs*. In: *Lam 'bras slob bshad*, Vol. 1 (ka), 76-113 (38a1-57a1).

『サパン伝』(ヤルルン造): Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan, *Chos kyi rje Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa 'bring po bzhugs so*. In: *Lam 'bras slob bshad*, Vol. 1 (ka), pp. 64-76 (32b1-38b1).

『シャル寺統史』: Blo gros bstan skyong, *dPal ldan zhwa lu pa'i bstan pa la bka' drin che ba'i skyes bu dam pa rnams kyi rnam thar lo rgyus ngo mtshar dad pa'i 'jug sngogs*. In: *The History of the Monastery of Zhwa lu, being the texts of the Zhwa lu gdan rabs and the Autobiography by Zhwa lu Ri sbug Sprul sku Blo bzang bstan skyong*. Tashi Yangphel Tashigang (ed.), Leh, 1971.

『シュチェン聴聞録』: Zhu chen Tshul khriims rin chen, *Zhu chen tshul khriims rin chen gyi gsan yig bzhugs so. Record of Teachings Received: The gsan-yig of*

- Zhu chen tshul khrims rin chen of sDe dge*. Vol. 1, Ngawang Gyaltzen/ Ngawang Lungtok. (ed.), Dehradun, 1970.
- 『新旧カダム史』: Paṇ chen bSod nams grags pa, *bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan zhes bya ba bzhugs*. In: *Two Histories of the bKa' -gdams-pa Tradition from the Library of Burmikiok Athing*. Gangtok, Sikkim, 1977, pp. 1-205.
- 『青冊』: 'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1984.
- 『赤冊』: Tshal pa Kun dga' rdo rje, *Deb ther dmar po*. Dung dkar blo bzang 'phrin las (ed.), 2nd. ed., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.
- 『雪域人名辞典』: Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod. Ku zhul grags pa 'byung gnas/ rGyal ba blo bzang mkhas grub (ed.), mTsho sngon mi rigs par khang, 1992.
- 『タクパギェルツェン伝』: Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *rJe btsun rin po che'i rnam thar bzhugs*. In: *Lam 'bras slob bshad*, Vol. 1 (ka), pp. 35-57 (18a4-29a4).
- 『中観見教導中篇』: Red mda' ba gZhon nu blo gros, *Byang chub kyi sems gnyis sgom pa'i man ngag dang por mdzad pa bzhugs so*. [alias, *dBu ma'i lta khrid 'bring po*] In: *rJe btsun Red mda' ba gZhon nu blo gros zhabs kyi gsung 'bum*, Vol. 5, Sa skya'i dpe rnying bsdu sgrig khang, 2009, pp. 313-341.
- 『中観思想史』: Shākya mchog ldan, *dBu ma'i byung tshul rnam par bshad pa'i gtam yid bzhin lhun po zhes bya ba bzhugs so*. In: *The Complete Works (gsung 'bum) of gSer mdog paṇ chen Shākya mchog ldan*. Vol. 4, Nagawang Topgyal (ed.), 24 vol.s, Delhi, 1995, pp. 209-248 (1-20b7).
- 『ツェテン仏教史年表』: Tshe tan zhabs drung, *bsTan rtsis kun las btus pa*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, [1982].
- 『ツォンカパ大伝』: mKhas grub dGe legs dpal bzang, *rJe btsun bla ma Tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs zhes bya ba bzhugs so*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1982. [sKu 'bum ed.]
- 『ツォンカパ伝』(チャハル造): Cha har dge bshes Blo bzang tshul khrims, *rJe thams*

cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i rnam thar go sla bar brjod pa bde legs kun gyi 'byung gnas zhes bya ba. The Collected Works (gsung 'bum) of Cha har dge bshes Blo bzang tshul khrims. Chatring Jansar Tenzin (ed.), Vol. 2, New Delhi, 1971.

『トウンカル大辞典』: *Dung dkar tshig mdzod chen mo. Dung dkar Blo bzang 'phrin las (ed.). Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.*

『反駁書集成』: *dGag lan phyogs bsgrigs. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1997.*

『プトウン伝』: *dGra tshad pa Rin chen rnam rgyal, Chos rje thams cad mkhyen pa Bu ston lo tsā ba'i rnam par thar pa sNyim pa'i me tog ces bya ba bzhugs so. In: Ruegg 1966, p. 193ff.*

『ペルデンツルティム伝』: *dKon mchog rgyal mtshan, Bla ma dam pa dPal ldan tshul khrims pa'i rnam thar bzhugs. In: Lam 'bras slob bshad, Vol. 1 (ka), pp. 406-413 (203b2-207a5).*

『法輪設定』: *Shākya mchog ldan, Chos kyi 'khor lo skor ba'i rnam gzhag ji ltar grub pa'i yi ge gzu bor gnas pa'i mdzangs pa dga' byed ces bya ba. In: The Complete Works (gsung 'bum) of gSer mdog pañ chen śākya mchog ldan. Nagwang Topgyal (ed.), Vol. 16 (ma), Delhi, 1955, pp. 457-482 (13 fols.)*

『マントウ仏教史年表』: *Mang thos Klu sgrub rgya mtsho, bsTan rtsis gsal ba'i nyid byed lhag bsam rab dkar zhes bya ba. In: Sa skya'i chos 'byung gces bsdus, Vol. 5, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 169-402.*

『牟尼密意解明』: *Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, Thub pa'i dgongs pa rab tu gsal ba zhes bya ba'i bstan bcos bzhugs. Sa pañ Kun dga' rgyal mtshan gyi gsung 'bum, Vol. 1, Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1992, pp. 1-212.*

『ヤルルン仏教史』: *Śākya rin chen sde, Yar lung jo bo'i chos 'byung bzhugs so. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2012.*

『ラマタムバ伝』: *dPal ldan tshul khrims, dPal ldan Bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan gyi rnam par thar pa bzhugs. In: Lam 'bras slob bshad, Vol. 1 (ka), pp. 386-406 (193b4-203b2).*

『レンドワ伝』: *mNga' ris pa Sangs rgyas rtse mo, rJe btsun thams cad mkhyen pa Ku ma ra ma ti'i rnam thar Ngo mtshar rmad byung zhes bya ba bzhugs so. In: rJe btsun Red mda' ba gzhon nu blo gros zhabs kyi gsung 'bum. Sa skya'i dpe rnying*

bsdus grig khang (ed.), Vol. 1, np., 2009, pp. 1-73. Cf. Roloff 2009, pp. 67-165.

『ロントゥン伝』: Shākya mchog ldan, *rJe btsun thams cad mkhyen pa'i bshes gnyen shākya rgyal mtshan dpal bzang po'i zhal snga nas rnam par thar pa ngo mtshar dad pa'i rol mtsho zhes bya ba*. In: *The Collected Writings of gSer mdog Pan chen Shākya mchog ldan*. Kunzang Tobgey (ed.), Vol. 16, Timphu, 1975, pp. 299-377 (1-40a4).

参考文献

石濱裕美子/福田洋一

2008 『聖ツォンカバ伝』、大東出版社。

クンガ・テンパ

2016 「サキヤ派概説」『特集チベット仏教』（サンガジャパン24）、pp. 513-521。

小林守

1999 「ゲルク派による二種のコラムバ批判書」『印仏研』48-1、pp. 201-206。

西沢史仁

2007 「サキヤパンディタの認識手段論—認識手段の定義をめぐる—」『東洋文化研究所紀要』152、pp. 325-379。

2011 『チベット仏教論理学の形成と展開—認識手段論の歴史の変遷を中心として—』、全四巻、東京大学、2011、第一巻。[博士論文]

2012 「サンブ教学の歴史的展開に関する一考察」『日本西藏学会々報』58、pp. 1-14。

2013 「ゲルク派論理学の歴史的展開の一側面—ラトゥ学堂の成立しとその教学を中心として」『インド論理学研究』6、pp. 95-168。

2017 「チャバ・チューキセングの中観思想—その独自性と思想的背景—」『日本西藏学会々報』62、pp. 25-39。

2018a 「チベット初期中観思想における空性理解—ゴク翻訳師、トルンパ、ギャマルワ、チャパー—」『日本西藏学会々報』64、pp. 35-54。

2018b 「チベット初期中観思想における二諦説—二諦の分類の意味をめぐる—」『印仏研』67-1、pp. 188-193。

2019 『チベット初期中観思想における二諦説—トルンパとギャマルワの二諦を巡る論争—』『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』36、pp. 79-93（要旨）；pp. 1-204（電子版本文）。

袴谷憲昭

- 1989 「チベットにおけるインド仏教の継承」『チベット仏教』（岩波講座・東洋思想、第二巻）、岩波書店、pp. 119-151。

羽田野伯猷

- 1954 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成 第一巻チベット篇Ⅰ』法蔵館、1986、pp. 46-191。（初出：『東北大学文学部研究年報』5）
- 1955 「カーダム派（Bkaḥ-gdams-pa）についてー Vinayadhara との交渉ー」『チベット・インド学集成 第一巻チベット篇Ⅰ』法蔵館、1986、pp. 205-215。（初出：『印仏研』3-2）
- 1957 「Kaśmīra-mahāpaṇḍita “Śākyaśrībhadrā”」『チベット・インド学集成 第一巻チベット篇Ⅰ』法蔵館、1986、pp. 239-258。（初出：『文化』21-5）
- 1965 「チベットにおける仏教観の形成についてー菩提道灯・サンブ仏教学・カーダム宝冊等をめぐって」『チベット・インド学集成第一巻チベット篇Ⅰ』法蔵館、1986、pp. 277-303。（初出：『文化』29-2）
- 1966 「チベット大蔵経縁起Ⅰ. ナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐってー」『チベット・インド学集成第二巻チベット篇Ⅱ』法蔵館、1987、pp. 197-292。（初出：『鈴木学術財団研究年報』3）
- 1968 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『チベット・インド学集成第二巻チベット篇Ⅱ』法蔵館、1987、pp. 3-195（初出：『東北大学日本文化研究所研究報告』4）

伏見英俊

- 2010 「mChims Nam-mkha'-grags と sNar-thang 寺の学系について」『関西大学東西学術研究所紀要』43、pp. 21-33。

松本史朗

- 1979 「Sa skya paṇḍi ta の教学に関する一考察」『日本西藏学会々報』25、pp. 7-9。
- 1982 「チベットの中観思想」『東洋学術研究』21-2、pp. 161-178。
- 1997 『チベット仏教哲学』、大蔵出版。

吉水千鶴子

- 2006 「インド・チベット中観思想史の再構築へむけて」『哲学・思想論集』32、pp. 73-112。
- 2012 「チベットの中観思想」『空と中観』（シリーズ大乘仏教6）、春秋社、

pp. 113-135。

Heimbel, Jörg

2011 “Biographical Sources for Researching the Life of Ngor chen Kun dga’ bzang po (1382-1456).” *Revue d’Etudes Tibétaines* 22, pp. 47-91.

2013 “The Jo gdan tshogs sde bzhi: An Investigation into the History of the Four Monastic Communities in Śākyaśrībhadrā’s Vinaya Tradition.” In: *Nepalica-Tibetica: Festgabe for Christoph Cüppers*. Vol. 1, International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 187-241.

Hugon, Pascale

2004 *mTshur ston gzhon nu seng ge: Tshad ma shes rab sgron ma*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 60, Wien.

Jackson, David P.

1987 *The Entrance Gate for the Wise (Section III): Sa-skyā Paṇḍita on Indian and Tibetan Tradition of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols. Wien.

1988 [Introduction:] *Rong-ston on the Prajñāpāramitā Philosophy of the Abhisamayālaṃkāra: His Sub-commentary on Haribhadra’s ‘Sphuṭārtha’, A Facsimile Reproduction of the Earliest Known Blockprints Editions, from an Exemplar Preserved in the Tibet House Library, New Delhi*. Nagata Bunshodo: Kyoto.

Roerich, George N.

1949 *The Blue Annals*. 1st ed. Calcutta, 1949, reprint, Delhi, 1995.

Roloff, Carola

2009 *Red mda’ ba: Buddhist Yogi-Scholar of the Fourteenth Century*. Wiesbaden, 2009.

Ruegg, David S.

1966 *The Life of Bu ston rin po che: With the Tibetan Text of the Bu ston rNam thar*. Serie Orientale Roma 34, Roma.

2000 *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy: Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought. Part 1*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 50, Wien.

Van der Kuijp, Leonard W. J.

1983 *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology: From the Eleventh to the Thirteenth Century*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.

1989 *An Introduction to Gtsang-nag-pa's Tshad-ma rnam-par nges-pa'i ti-ka legs-bshad bsdus-pa: An Ancient Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Otani University Collection No. 13971*. In: 『知識論決訳広註善釈要集』(大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書)、臨川書店.

1993 "Forteenth Century Tibetan Cultural History III: The Oeuvre of Bla ma dam pa Bsod nams rgyal mtshan (1312-1375), Part One." *Berliner Indologische Studien* 7, pp. 109-147.

2018 "Forteenth Century Tibetan Cultural History III: The Oeuvre of Bla ma dam pa Bsod nams rgyal mtshan (1312-1375), Part Two." *Revue d'Etudes Tibétaines* 46, pp. 5-89.

Yoshimizu, Chizuko

1996 *Die Erkenntnislehre des Prasāṅgika-Madhyamaka nach dem Tshig gsal ston thun gyi tshad ma'i rnam bśad des 'Jam dbyaṅs bpad pa'i rdo rje*. Einleitung, Textanalyse, Übersetzung. Wien.

Yoshimizu, Chizuko, et.al.

2013 *Zhang thang sag pa 'Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka. Part I.: folios 1a-26a3 on Candrakīrti's Prasannapadā ad Mūlamadhyamakakārikā I. 1*. Tokyo: Toyo Bunko. [共編者: Nemoto, Hiroshi]

2018 *Zhang thang sag pa 'Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka. Part II.: folios 26a3-40b5 on Candrakīrti's Prasannapadā ad Mūlamadhyamakakārikā I. 1-14*. Tokyo: Toyo Bunko. [共編者: Nemoto, Hiroshi; Kano Kazuo]

* 本稿は、令和元年度科学研究費「若手研究」(19K12951)の助成に基づく。